

茨城県指定史跡

土浦城址発掘調査報告書

1989年3月

土浦市教育委員会

序

土浦市は、水と緑に恵まれ、長い歴史と伝統を受け継いで今日に至っています。市内には、この風土に育まれた数多くの史跡や文化財が各地に存在しております。

このたび、土浦を代表する史跡である「土浦城址」を市民の皆様の協力を得て、復元・整備することとなり、その一環として東・西櫓・土塁の学術調査を実施することとなりました。

今回の調査によって、多量の陶・磁器、瓦などが出土したほか、東・西櫓の地下地蔵や建物痕跡等が明らかになり、復元を進めてゆくための重要なポイントを解明することができました。

今後とも市民の皆様の文化財へのより一層のお力添えをお願い申し上げますとともに、文化財保存と活用のためにご指導ご助言を賜わりたいと存じます。

最後になりましたが、調査及び報告書発刊に際して、ご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

土浦市教育委員会

教育長　日下部　晃

例　　言

- 1 本書は土浦市教育委員会が茨城県指定史跡土浦城址整備事業の一環として西櫓、東櫓、土壘を復元するための基礎資料を収集することを目的として行なった地下事業の学術調査報告である。
- 2 調査は土浦市教育委員会の委託を受けて土浦市遺跡調査会土浦城址調査隊が行なった。調査期間は昭和63年6月3日から同年8月4日までである。
- 3 本書の執筆は桜井正広（第I章）、瀬田正明（第II章）、石川功（第III章・第VII章2）、吉田恵二（第IV章・第VI章第1節）、加藤晃（第V章・第VI章第2節）、神戸信俊（第VII章）米川仁一（第VII章1）、塩谷修（第VII章3）が行ない、吉田恵二が編集した。
- 4 発掘調査から報告書作成までの間、下記の方々、機関から多大な御指導、御助力を賜った。記して厚く謝意を表するものである。
土浦市立博物館、土浦市立青少年の家、東京大学遺跡調査室、国文学研究資料館、国立公文書館、鈴木嘉吉（奈良国立文化財研究所所長）、外山泰久（土浦日大高校）、近藤好和（刀剣博物館）、古谷毅（國學院大學栃木高校）、安藤敏孝（石岡市教育委員会）、岡林孝作（筑波大学大学院生）、斎田克史、寺島孝一（東京大学助教授）、渡辺ますみ（東京大学遺跡調査室）、金子智（早稲田大学大学院生）
敬称略

目 次

	頁
緒 言	
例 言	
第I章 調査に至る経緯.....	1
第II章 調査の経過.....	3
第1節 調査の経過.....	3
第2節 土浦城址発掘調査団組織.....	7
第III章 土浦城の沿革.....	8
第IV章 遺構.....	10
第1節 西櫓.....	10
第2節 東櫓.....	16
第3節 土壘.....	24
第V章 遺物.....	27
第1節 瓦類.....	27
第2節 土器類.....	33
第3節 その他の遺物.....	36
第VI章 考察.....	41
第1節 遺構.....	41
第2節 遺物.....	44
第VII章 西櫓の復元.....	49
第VIII章 付録.....	56
1 二の丸土壘の調査.....	56
2 横門の調査.....	57
3 郁文館の調査.....	58

挿 図 目 次

第1図 土浦城本丸跡全体図.....	3
第2図 土浦城西櫓周辺地形図.....	11
第3図 西櫓土壘断面剖析部北面断面図.....	12
第4図 西櫓発掘遺構全体図.....	13
第5図 土浦城東櫓周辺地形図.....	17
第6図 東櫓隣石断面図.....	18
第7図 東櫓発掘遺構全体図.....	19
第8図 東櫓上段剖析部北面断面図.....	22
第9図 東櫓丸太地業平面図及び断面図.....	22
第10図 土壘第1トレンチ北面土層図.....	24
第11図 土壘第2トレンチ北面土層図.....	25
第12図 土壘第3トレンチ北面平面図及び 土層図.....	26
第13図 土浦城址出土瓦瓦拓影及び実測図.....	28
第14図 土浦城址出土丸瓦瓦拓影及び実測図.....	29
第15図 土浦城址出土瓦実測図及び拓影.....	30
第16図 土浦城址出土板瓦実測図.....	32
第17図 土浦城址出土陶磁器実測図.....	34
第18図 土浦城址出土土器実測図.....	35
第19図 土浦城址出土土器実測図.....	36
第20図 土浦城址出土金属器・石製品・上 製品実測図.....	37
第21図 中心轄り分類模式図.....	44
第22図 底草分類模式図.....	44
第23図 子葉分類模式図.....	44
第24図 「江戸式」瓦当文様拓影.....	45
第25図 土浦城址瓦当文様拓影.....	47
第26図 西櫓復元図.....	51
第27図 西櫓・柱復元図.....	53
第28図 二の丸上土壘層図.....	56

表 目 次

第1表	江戸時代の土浦城の変遷	9	第6表	東橋礫石あたり痕跡計測表	23
第2表	西橋礫石計測表	15	第7表	東橋丸太地業計測表	23
第3表	西橋礫石あたり痕跡計測表	15	第8表	陶磁器観察表	38
第4表	西橋布石計測表	15	第9表	土器観察表 (1)	39
第5表	東橋礫石計測表	23	第10表	土器観察表 (2)	40

図版目次

図版1	土浦城本丸古絵図 (1)		2	東橋発掘区全景 (南から)	
図版2	土浦城本丸古絵図 (2)		1	東橋南北断剖面 (北から)	
図版3	1 西橋全景		2	東橋東西断剖面 (東から)	
	2 東橋・鐘楼遠景 (外堀から)		図版16	1 入側柱礫石彌形群 (東から)	
図版4	1 西橋遠景 (本丸から)			2 七一と彌形断剖部 (西から)	
	2 西橋遠景 (外堀から)		図版17	1 七一と彌形丸太地業 (南から)	
図版5	1 西橋と土堀 (外堀から)			2 七一と彌形丸太地業 (東から)	
	2 西橋と土堀 (外堀から)		図版18	1 七一と彌形丸太地業 (南から)	
図版6	1 西橋現状全景 (南から)			2 七一と彌形丸太地業 (東から)	
	2 西橋遺構全景 (北から)		図版19	1 参一は彌形丸太地業 (南から)	
図版7	1 西橋発掘遺構東半部 (南から)			2 参一は彌形丸太地業 (東から)	
	2 西橋発掘遺構西半部 (南から)		図版20	1 七一は礫石と彌形	
図版8	1 卷一は礫石地業			2 七一は礫石と彌形	
	2 卷一は礫石地業			3 五一は礫石と彌形	
	3 卷一は礫石地業			4 参一は礫石と彌形	
	4 卷一は礫石地業		図版21	1 土壘第1トレンチ全景 (東南から)	
図版9	1 参一は礫石地業			2 土壘第1トレンチ全景 (北西から)	
	2 七一は礫石地業			3 土壘第2トレンチ全景 (東から)	
	3 七一は礫石地業			4 土壘第2トレンチ全景 (西から)	
	4 七一は礫石地業		図版22	1 土壘第3トレンチ全景 (西から)	
図版10	1 五一は礫石地業			2 土壘第3トレンチ全景 (東から)	
	2 参一は礫石地業		図版23	1 第3トレンチ土壘手掘部全景 (北から)	
	3 土壘断剖部全景 (東から)			2 土壘手掘部と石敷遺構 (南から)	
	4 土壘断剖部全景 (西から)		図版24	1 第3トレンチ断剖部 (西から)	
図版11	1 七一は礫石地業断面			2 第3トレンチ旧地表面 (西から)	
	2 五一は礫石抜取穴と地業断面		図版25	1 第3トレンチ東端石列 (南から)	
	3 卷一は礫石地業断面			2 第3トレンチ旧地表面と盛土 (西南から)	
	4 参一は礫石抜取穴と地業断面		図版26	1 二の丸土壘調査状況	
図版12	1 参一と・五一と礫石抜取穴と地業			2 二の丸土壘調査状況	
	2 五一と礫石抜取穴		図版27	軽瓦・輪窓	
	3 参一と・五一と礫石抜取穴と地業 (東から)		図版28	丸瓦・御板瓦	
図版13	1 東橋現状全景 (南から)		図版29	御板瓦・磁器	
	2 東橋北端東西礫石列 (東から)		図版30	磁器・陶器	
図版14	1 東橋発掘区全景 (南から)		図版31	磁器・陶器・土器・土製品	
			図版32	土器・金属製品・硯	

第Ⅰ章 調査に至る経緯

土浦城は永亨年間に築城されたといわれており、約550年の栄枯盛衰の歴史をたどりながら、お城を中心として、生まれ育った城下町としての町並、その他多くの遺産を私たちに伝えてきた。

土浦城址は、明治31年に旧藩主であった土屋正直氏より土浦町が寄贈をうけその後、昭和9年土浦にふさわしい公園とするため、当時、造園の大家といわれた市川之雄氏及び橋岡梯二氏の設計によって、大改修が加えられ、現在の亀城公園の基礎ができた。

一方、昭和27年城郭としては県内屈指のことでの県文化財保護条例の規定による県指定の史跡（指定年月日…昭和27年11月18日、名称…土浦城跡及び櫓門）となり、文化財としての保護が図されることになった。

こうして、土浦城址は都市公園と文化財の史跡という二つの性格を持つことになる。土浦市の第4次総合計画の中では、都市化の進展と経済的情勢の変化をふまえ、調和のとれた魅力あるまちづくりのため、都市基盤の整備が重要な課題とされており、都市計画の「土浦市・緑のマスタープラン策定調査報告」によると、その目的の一つとして恵まれた自然を強調し、さらには、歴史的風土を計画に取り組み土浦の個性を強く表現していくことがあげられている。

この中で、亀城公園は近隣公園として位置づけられ、多くの市民によく利用されているこのレベルの公園の必要性が示されている。

これまでの整備状況をみると都市公園整備としては、石垣、ひょうたん池、あずま屋、動物小屋、濠の清掃など、また、管理面では、松喰虫の防除、管理人を配置しての清掃などを行っている。文化財保存整備としては、霞門の解体修理、高麗門の移築工事、櫓門解体保存修理工事等を行っている。

また、土浦の歴史的町並整備再生策定調査で結集し、土浦市商業近代化実施計画へ受け継がれたものでは、土浦の商業の活性化をはかるための核づくりが求められており、亀城公園の再生とあわせて、土浦中心市街地の奥核づくりを行ない、駅前地区とあわせた広がりのある商店街の再生が課題となっている。

こうした点をふまえ都市公園との連携を保ちながら、文化財の史跡としての整備を計画すべく、昭和59年4月土浦城址整備検討委員会が発足し伝統ある歴史を踏まえた基本計画の策定を進めることになる。

アンケート調査による市民の意向調査、4回の委員会、11回の幹事会、専門委員の指導助言も2回うけ、昭和61年3月土浦城址整備検討委員会報告書が提出された。

内容は、基本方針として、整備にあたっては、文化的な価値を高めることを何よりも優先し

て考える。整備復元するにあたっては、歴史にもとづく学術的検討を十分踏まえながら整備事業をすすめる。城址内に点在する近代建築物は、撤去・移転等を検討することなどである。

また、整備は、城址地区（県指定史跡を中心に隣接する博物館用地と小公園）及び城下町地区さらに指定地外についても、環境整備を考慮することなどである。

そして、短期・中期・長期の整備事業（案）についても報告がなされている。昭和61年12月、土浦城址整備事業の推進と施設運用の検討を行うことになる。

これまでに、

- ① 土浦城址整備に係わる総事業予算の概算額の検討
- ② 土浦城復元のモデルとなる模型づくり
- ③ 本丸、二の丸の発掘調査計画
- ④ 専門委員会（歴史、建築）の発足
- ⑤ 環境整備専門委員会の発足と事業計画の見直し

が行われた。

また、市民団体で組織するお城づくりをすすめる会が、昭和63年4月に発足した。

こうした一連の整備事業の一環として今回の発掘調査を実施した訳だが、平成元年度から2年度にかけて建設を計画している西櫓及びその後に予定されている東櫓の建築についても大事な資料となることが期待され、6月3日より発掘調査を開始した。



現地説明会

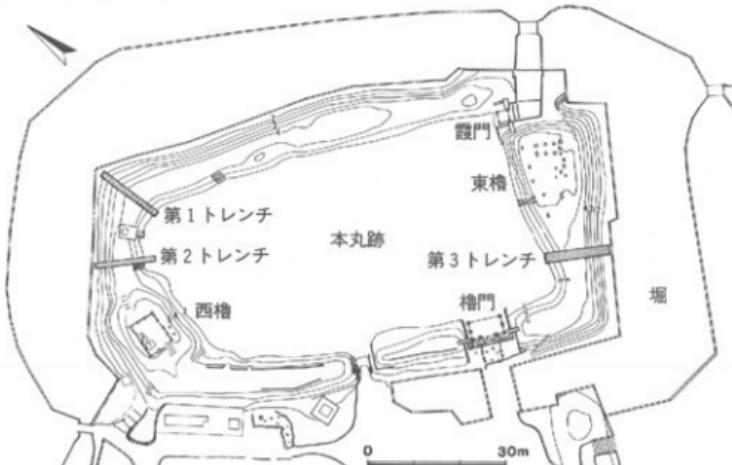
第II章 調査経過

第1節 調査の経過

土浦城址の発掘調査は、1988年6月3日から同年8月4日までの日程で実施した。途中、7月7日には新聞発表、7月9日には現地説明会を行ない、さらに調査終了後の8月9日に再び新聞発表を行なった後、遺構の埋め戻しを行なった。今回の調査は土浦城址整備事業の一環として西櫓・東櫓・土塁の復元を行なうにあたっての基礎資料の収集を目的としており、西櫓・東櫓については現状の正確な測量と地下地業の確認、土塁については形状と構築方法の確認を目標とした。以下、各地点について調査の経過を述べていく。

1 西櫓

西櫓には現在14個の礎石が残存し、そのうちの12個が整然と配列され、現状を留めている。そのため、この12個の礎石の柱筋に沿ってトレンチを設定した。その結果、それぞれの礎石の下に砂利を入れてつき固めた掘形地業が確認され、現存する12個の礎石のすべてが当初の位置を動いていないことが再確認された。さらに礎石列の内側に東西トレンチを2本設定した。その結果、北側のトレンチから外側柱と同様の掘形地業2ヶ所が検出され、現地表面でも確認できた2ヶ所の掘形地業と合わせて、合計4ヶ所の入側柱礎石跡の存在が確認された。



第1図 土浦城本丸跡全体図

- 6月3日 現状の写真撮影と水準点の移動を行なう。
- 6月4日 現存する柱筋に沿って遺り方を設定し、礎石と布石の平面実測を行なう。遺り方高は海拔5.60m。
- 6月11日 各礎石に上台・壁のあたり痕跡を確認し、写真撮影および実測を行なう。礎石も含めた東櫓土壇全体の平板測量を開始する。
- 6月14日 柱筋に沿ってトレンチを設定し発掘を開始する。各礎石の下に地業を確認する。
- 6月15日 2本の東西トレンチを設定し発掘を行ない、北側のトレンチで入側柱の礎石掘形地業2ヶ所を確認する。
- 6月24日 地業の写真撮影を行なう。
- 7月12日 地業の平面実測を行なう。
- 7月14日 地業および土壇の構築方法を解明するために東西トレンチの断ち割りを行なう。
- 7月15日 断ち割りの写真撮影。
- 7月17日 級石と布石の立面図作成。断ち割り断面上層図の作成を行なう。
- 8月2日 地業掘形を完掘する。
- 8月3日 地業掘形の写真撮影および平面実測。終了後、埋め戻し。

2 東櫓

東櫓には20個の礎石が残存している。その配置は不規則で現状を留めているとは考えられない。そこで北側と西側の礎石列に沿ってトレンチを設定し、さらに外側柱筋内側に南北トレンチを4本設定して発掘を行なった。その結果、入側柱10個の地業が確認された。これらは構築方法解明のために断ち割りを行なって調査した結果、砂利地業の下に丸太および堅枕が埋設されていることが確認された。また、この断ち割りによって外側柱18個が溝状の布掘りをロの字状に巡らしたのち、砂利をつき固めて礎石を配置していることが確認された。

- 6月3日 現状写真撮影と水準点の移動を行なう。
- 6月4日 南側・東側の礎石の柱筋に沿って遺り方を設定する。遺り方高は海拔5.60m。
- 6月5日 級石の現状を平面実測。
- 6月11日 各礎石に土台・壁のあたり痕跡を確認し、写真撮影および実測を行なう。
- 6月19日 級石も含めた東櫓土壇全体の平板測量を開始する。
- 6月20日 級石列に沿ってトレンチを設定し発掘を開始する。北面の隅で外側の礎石掘形地業を確認する。
- 7月2日 入側柱の礎石掘形地業を確認するために東西トレンチを設定する。発掘の結果、10ヶ所の礎石掘形地業を検出し、これらが外側柱に比べて規模が大きいことを確認する。

- 7月18日 地業の平面実測を行なう。
- 7月20日 構築方法を解明するためにトレンチの断ち割りを開始する。
- 7月21日 入側柱の地業の下部に丸太材の空洞痕跡を検出する。
- 7月22日 トレンチの断ち割りをさらに続け、外側柱の付近が布掘り状に掘り込んで整地していることを確認する。
- 7月23日 断ち割り部の断面土層図の作成後、地業掘形を完掘し、丸太材の下部にさらに堅杭の空洞痕跡があることを確認する。
- 7月26日 地業掘形の平面図を作成する。「七一と」の掘形で堅杭の空洞痕跡中から松杭の小断片を検出する。
- 7月31日 全景の写真撮影。
- 8月3日 掘形の写真撮影後、埋め戻しを開始する。

3 土壘

土壘の調査は形状の確認と構築方法の解明のため、3ヶ所にトレンチを設定し、発掘を行なった。しかし、第1トレンチでは土壘は削平され、第2トレンチでは石段構築の際に大きく擾乱されていることが確認され、旧状を留めていたのは第3トレンチのみであった。この第3トレンチでは土壘断ち割りを行ない、構築方法の確認と旧地表面の検出をした。

① 第1トレンチ

第1トレンチは本丸土壘の北西隅を確認するために幅1.5mで設定した。しかし、発掘の結果、土壘の下層から削平された面が検出され、現在の土壘が一度削平された後に再び構築されたものであることが確認された。

- 6月10日 本丸土壘の北西隅に幅1.5m、長さ15mの第1トレンチを設定する。
- 6月11日 第1トレンチの発掘を開始する。
- 6月25日 削平された平坦面を確認する。
- 6月29日 削平された平坦面を全面的に検出する。
- 7月14日 全景の写真撮影を行ない、断面土層図を作成する。
- 7月25日 土壘削平の状況を確認するために、さらに幅0.5mのサブ・トレンチを設定して掘り下げる。遺構の検出はなかった。
- 7月26日 サブ・トレンチの写真撮影。
- 7月27日 サブ・トレンチ部分の断面土層図を追加作成する。
- 7月31日 埋め戻しを開始する。

② 第2トレンチ

第2トレンチは西櫓の北側に幅1.5m、長さ13mで設定した。しかし、発掘の結果、トレンチ

南側の石段を構築する際に擾乱を受け、堀側の一部しか残存していないことが確認された。

6月12日 西櫓の北側に幅1.5m、長さ13mの第2トレンチを設定する。

6月18日 第2トレンチの発掘を開始する。石段の構築の際に土壘の大部分が擾乱されていることを確認する。

7月14日 土壘残存部の写真を撮影する。

7月26日 構築方法を確認するために、土壘残存部の掘り下げを開始する。

7月29日 全景の写真撮影。

7月30日 断面上層図の作成を行なう。

8月2日 埋め戻しを行なう。

③ 第3トレンチ

第3トレンチは東櫓の南側に幅2mで設定し、土壘の旧状を確認し、土壘上面で石敷遺構を検出した。また、構築方法を確認するために北壁に沿って幅0.5mのサブ・トレンチを設定し、築城以前の旧地表面を確認し、その直上から縄文土器が出土した。

7月25日 第3トレンチを東櫓の南側に幅2m、長さ15mで設定し、発掘を開始する。ほぼ旧状を留めていることを確認する。

7月26日 土壘上面で南北方向の石敷遺構を検出する。

7月30日 全景の写真撮影を行ない、平面図を作成する。

7月31日 幅0.5mのサブ・トレンチを北壁に沿って設定する。本丸側のトレンチ西端で築城以前の旧地表面を検出する。この旧地表面直上から縄文土器が一点出土する。

8月3日 サブ・トレンチの写真撮影を行ない、断面土層図を作成する。

8月9日 埋め戻しを行なう。

④ 二の丸土壘

二の丸土壘は本丸北面から西側にかけて、亀城公園管理棟の改修に伴って削平されたため、その箇所において土壘の形状を確認する目的で調査を行なった。

7月30日 土壘の削平された箇所の写真撮影を行ない、断面土層図を作成する。

第2節 土浦城址発掘調査団組織

会長	永山正	(土浦市文化財保護審議会会长)
副会長	日下部晃	(土浦市教育委員会教育長)
理事	茂木雅博	(土浦市文化財保護審議会委員)
"	田中昭	(土浦市都市計画部次長)
"	中山清	(土浦市建築指導課長)
"	神林栄久	(土浦市耕地課長)
監事	杉野利男	(土浦市教育委員会教育次長)
"	滝ヶ崎洋之	(土浦市企画課長)
幹事	佐野賢治	(土浦市教育委員会社会教育課長)
"	岩沢茂	(土浦市教育委員会社会教育課主査) (平成元・2~)
"	桜井正広	(土浦市教育委員会社会教育課文化係長)
"	石山淳一	(土浦市教育委員会社会教育課文化係主幹)
"	塙谷修	(土浦市教育委員会社会教育課文化係主事)
"	石川功	(土浦市教育委員会社会教育課文化係主事) (調査担当)
团长	吉田恵二	(國學院大學助教授)
調査員	瀬田正明(主任), 米川仁一	(國學院大學大学院生)
調査	松尾美貴, 渡辺咲子, 板倉歎之, 小林青樹, 滝沢規朗, 繁川金也, 門脇伸一, 鈴木篤英, 鈴木俊雄, 中村大, 川井修(以上國學院大學学生), 宮本哲郎, 鍛治弘昌, 井上宏孝, 村上泰司, 安田智幸, 江口桂, 持谷明宏(以上中央大学学生), 福田明美, 半澤幹雄(以上奈良大学学生)	
補助員	川村孝吉, 青木新三, 佐野守男	
作業員	加藤晃(國學院大學大学院生)	(國學院大學学生)
遺物整理	倉橋史生	(國學院大學学生)
事務局	土浦市教育委員会 佐野賢治, 岩沢茂, 桜井正広, 矢口俊則, 石山淳一, 宮本孝子, 飯田真巳, 石川功	
参与	神戸信俊	

第III章 土浦城の沿革

土浦城は、一説には平安時代末に平将門によって築かれたとも言われるが、証拠に乏しく信じることはできない。史料上に「土浦」の名が見られるのは、永享7（1435）年の『鹿島富有注文』中の「土浦若泉三郎」が最も古いものである。この土浦の富有者「若泉三郎」が、土浦の領主的な存在としては初期のものと考えられ、その居館がすなわち土浦城の前身ではなかつたかと推測される。

この時代、土浦は南野莊（現出島村、土浦市北半部、新治村にかかる地域）を領有する旧御家人の筑波の小田氏と、元中3（至徳3、1386）年小田氏の失脚により信太莊（現土浦市南半部、阿見町にかかる地域）を領有した山上杉氏系の江戸崎の土岐氏の境界にあたっていた。若泉氏が土着の開発領主であったか、小田・土岐氏の被官であったかは不明であるが、その後永正13（1516）年若泉五郎左衛門のとき若泉氏は滅され、土浦城は小田氏の家臣である信太（信田）氏あるいは菅谷氏の居城となった。この時の城主については、信太治部少輔範貞という説と、菅谷左衛門尉（勝貞か）という二説があるが、16世紀中ばまでには菅谷氏の支配となり、勝貞・政貞・範政の三代にわたって土浦に在城した。土浦城と菅谷氏は、小田家の重臣として、県北の佐竹氏、県西の多賀谷氏等に対抗した。土浦城は常南諸城の中核として、また小田氏の結の城として特に重要視され、衰退する小田氏を盛り立てたが、天正18（1590）年関東を手中にした徳川家康によって接収された。この中世土浦城については、現在史料が残されていないため詳細は不明であるが、他に比べて若干標高の高い日本丸及び二の丸の周辺であったものと推定されている。

家康の江戸入城後、この地域は第二子である結城秀康の所領となり、土浦城には代官を置いて統治させた。この統治は秀康が越前北の庄に転封になる慶長6（1601）年まで続いたが、この時期の土浦城には、手を加えたという記録が見つかっていないことから、大規模な城の修築や改築は行なわれなかったものと思われる。

秀康転封ののち、土浦城では江戸時代前期までに城の諸施設の拡充が実施された。まず（藤井）松平信一が、子信吉の代まで二代16年間在城し、城下を通る水戸街道の整備や、城下町、施設等の土浦城の骨格が整えられた。松平氏転封ののち、土浦には西尾忠永・忠照が二代32年、朽木種綱・種昌が二代21年間在城した。このときに土浦城は、今回調査の行なわれた東・西櫓をはじめ、櫓門等の施設が建てられ、城内の主だった施設が一応完成した。

朽木氏転封ののち、寛文9（1669）年十屋敷直が駿河田中城より入城した。十屋氏はこの後（大河内）松平信興の入城した天和2（1682）年からの5年間を除き、版籍奉還まで約200年に

わたり土浦を統治した。この時期は土浦城在職大名の中でも最も長期であるが、城内諸施設について新築したものは少なく、多くは修理等を行ったのみである。(第1表)

明治4(1871)年の施設監査を経て、土浦城の諸施設は、他の藩の城郭と同じく、多くは民間に売却された。大手門・搦手門を初めとした主要な防衛施設は明治6(1873)年に破壊・入札等により姿を消したが、本丸御殿はその後も土浦支庁・新治郡役所として使用された。しかし明治17(1884)年に東魯とともに火災により焼失した。外丸御殿(旧藩主邸)も新治郡裁判所庁舎となつて残っていたが、明治38(1905)年火災により焼失した。西橋はこれらの災害から免れたものの、昭和24年キティ台風の時に破損したのにともない解体された。そのため現在遺存する施設は、櫓門、霞門、高麗門(前川御門)の三門を残すのみである。また、城跡は明治31(1897)年に土浦市に寄贈され現在「亀城公園」として市民の間に親しまれている。

第1表 江戸時代の土浦城の変遷

歴代藩主名	在職期間	石高	文獻史料による城内諸施設の整備記録
松平信一	慶長6年～慶長9年 (1601～1604)	3万5千石	〔慶長8〕二の丸の仕切門、黒門、並びに南北西三門を建てる。
松平信吉	慶長9年～元和3年 (1604～1617)	4万石	
西尾忠永	元和3年～元和6年 (1617～1620)	2万石	〔元和6〕東西櫓、鐘楼を建てる。
西尾忠熙	元和6年～慶安2年 (1620～1649)	2万石	〔元和8〕追手門を櫓門に改める。
朽木種綱	慶安2年～万治3年 (1649～1666)	3万石	〔明暦2〕本丸の門を櫓門に改める。〔万治元〕營庫、焰硝庫を建てる。〔万治2〕搦手門、外記門を瓦葺に改める。
朽木種昌	寛文1年～寛文9年 (1661～1669)	2万7千石	〔寛文4〕土塁上の屏を瓦葺に改める。
上屋政直	寛文9年～延宝7年 (1669～1679)	4万5千石	〔延宝6〕二の丸に米倉を建てる。
土屋政直	延宝7年～犬和2年 (1679～1682)	4万5千石	
松平信興	天和2年～貞享4年 (1682～1687)	2万2千石	〔天和4～貞享2〕城内各所の土塁を修復する。〔貞享2〕兵庫口、不破口に門を建てる。本丸南門を改築する。 堀藏を建てる。〔貞享2～3〕南門舟形、木門S字馬出しを設置する。
土屋政直	貞享4年～享保4年 (1687～1719)	9万5千石	
上屋政直	享保4年～享保19年 (1719～1734)	9万5千石	〔享保8〕立田幕を築く。〔享保17〕二の丸、三の丸の土塁を修復し、新たに櫓を設ける。
上屋尊直	享保19年～安永5年 (1734～1776)	9万5千石	〔享保21〕大手門、太鼓櫓を修築する。〔元文9〕多門(櫓?)を修築する。
土屋尊直	安永5年～安永6年 (1776～1777)	9万5千石	
土屋泰直	安永6年～寛政2年 (1777～1790)	9万5千石	
土屋英直	寛政2年～享和3年 (1790～1803)	9万5千石	城内に藩校都文館を設ける。
土屋寛直	享和3年～文化8年 (1803～1811)	9万5千石	〔文化5〕土浦城附櫓門の修理向を提出する。〔文化7〕大手櫓門、西櫓の修理向を提出する。
土屋彦直	文化8年～天保9年 (1811～1838)	9万5千石	
土屋寅直	天保9年～慶応4年 (1838～1868)	9万5千石	〔天保10〕外西町に藩校都文館を移す。〔嘉永5〕城内住居の修理向を提出する。文化7年向の轄1ヶ所を修理する。〔安政2～3〕毛屋・大風雨のため城内外郭が破損する。
土屋季直	慶応4年～明治2年 (1868～1869)		〔明治2〕版籍奉還
			〔明治4〕廃藩置県

第IV章 遺 構

第1節 西 構

西面土壇の南端に作られた長方形状の土壇上に位置する梁行3間、桁行4間の構で、木造二階建て入母屋造の南北棟である。建物本体は昭和24年8月のキティ台風の被害をこうむり、取り壊されたために残っていないが、外側柱礎石14個のうち12個が原位置を保っている。礎石間に置かれた布石もほぼ原状を留めており、遺存状況はきわめて良好である。なお、土壇の東南部に礎石群から遊離して置かれている2個の礎石が、抜き取られた2個の礎石にあたると推測される。

1 土壇

上面が東西約9m、南北約12mの長方形に近い平坦面をなす土壇で、方位は真東西南北を示さず、北で西へ23度片寄っている。裾部外周は現状で約30度の傾斜を以て広がり、西側斜面の裾部は外堀の内岸に接している。

土壇の構築法を調べるために、建物内部を1ヶ所約50cmの深さまで掘り下げた。土壇構築土は黒褐色の粘質土で、砂礫を含まず、厚さ約3cmから20cmの幅でほぼ水平に積み重ねられている。版築もさほど強固なものではないが、上半部は1回に積む土の厚さが大きく、下半部へ行くほど盛土の厚さは小さく、版築の回数も多くなっている。

土壇上面の高さは海拔5.2mで、本丸現地表面より2.3m、外堀内岸より3.6m高くなっている。ただし、今回土壇の調査のために設定した3ヶ所のトレンチでは、本丸地域全域にわたって厚さ約40cmの盛土整地が明治以後になされていることが確認されており、^④ 明治以前の本丸地域原地表面と土壇上面の比高差は2.6mとなる。

④

昭和60年12月から61年1月まで西ヶ谷恭弘氏が行なった本丸地域の調査でも、明治17年の本丸焼失以後の盛土が30cm～40cmの厚さであることが確認されている。『土浦城発掘調査現地説明会資料』昭和61年1月。

2 級石

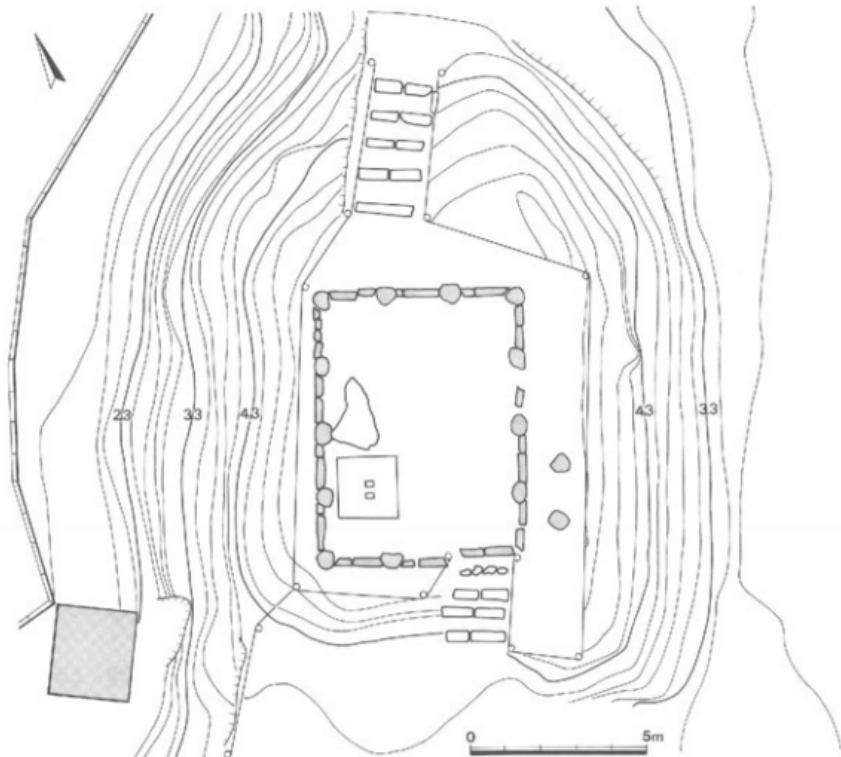
土壇上に残る14個の礎石はいずれも花崗岩ないし安山岩質の大型硬質の自然石をそのまま用いたもので、直径66～50cm、短径57～40cm、厚さ28～23cmを計り、全て比較的平坦な自然面を上面にして据え付けられている。

14個の礎石のうち、原位置にある12個の礎石の上面中央部の高さは海拔5.313m～5.24mで、

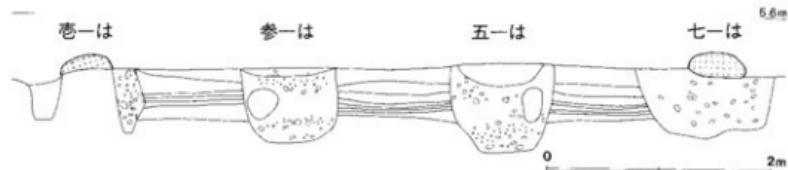
礎石間の比高差は7.3cmであり、礎石据え付に際して精度の高い測量工事が行なわれている。礎石上面と本丸原地表面との比高差は約2.7mである。

土壇上に残る14個の礎石の上面には風化した部分と全く風化していない部分がある。このうち、全く風化せず現状の表面を残す部分は礎石上に置かれた土台の下になっていた所、風化した部分は土台から外れた所に相当し、これをあたり痕跡という。

西櫓礎石上面に残るあたり痕跡は神戸信俊氏によって発見されたもので、あたり痕跡は礎石中央部に見られ、原位置にある礎石では、その方向は梁行あるいは桁行方向と一致している。特に建物四隅に位置する礎石では、あたり痕跡はL字状をとらず十字状を呈しており、建物四隅の土台の仕口が十字形をとる相欠きないし渡あごであったことを示している。あたり痕跡の幅12cm～23cm、長さ24cm～55cm。



第2図 土浦城西櫓周辺地形図



3 碓石掘形

礎石の据付方法を確認するため、外側柱の内側を一周するように幅50cmのトレンチを設定した。また、建物内に他の礎石掘形が存在するか否かを確認するため、幅50cmのトレンチを2本設定した。

外側柱礎石列の内側に設定したトレンチでは、礎石を据付けるために盛土造成の終った土壤上面から礎石1個毎に掘られた16個の掘形を検出した。

礎石掘形は平面隅丸方形ないし円形を呈し、一边（直径）115cm～83cm、深さ60cm～80cmで、掘形底面から砂利と粘質土を互層にして積み上げ、版築によってきわめて堅固に掘き固めている。この版築層の上に直接礎石を据え付けている。

一方、建物内に設定した2本のトレンチでは、新たに4ヶ所の礎石掘形を検出した。新たに検出された4ヶ所の礎石掘形は、入側柱の礎石用で、建物中心部を除いて南北両端からそれぞれ1間内側に入った柱筋に2ヶ所ずつ並んで配されている。掘形の規模、形状、掘形内の版築法とも外側柱礎石掘形と変わらない。しかし、4ヶ所とも礎石は抜き取られており、礎石抜取穴は直径60cm～50cm、深さ20cm～10cmで、抜取穴には黒褐色の粘質土が堆積している。掘形の規模や抜取穴の大きさから見て、入側柱の4個の礎石も外側柱の礎石とほぼ同様の大きさであったと推測される。

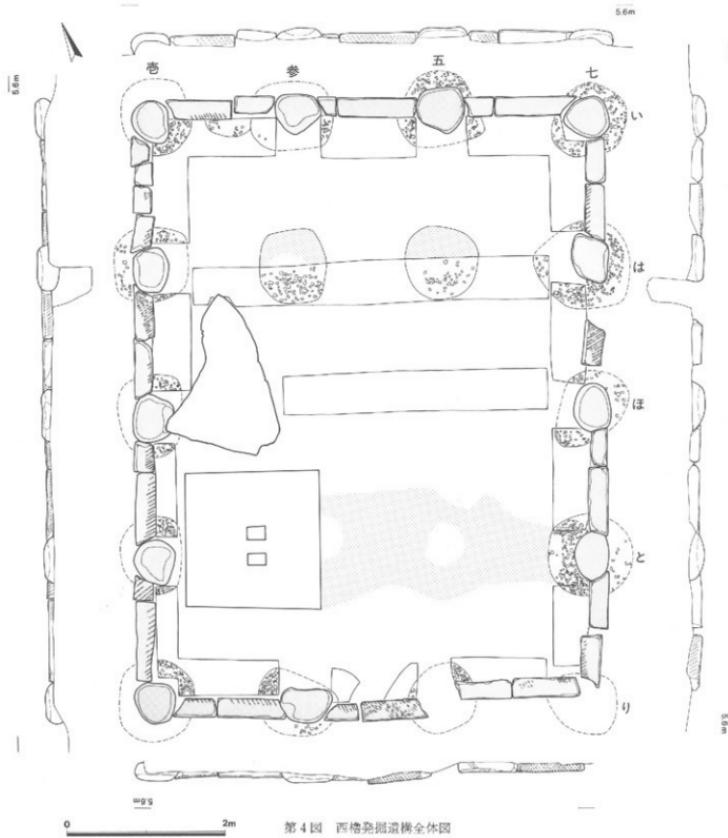
以上の事から、西櫓が外側柱14個、入側柱4個、合計18個の礎石をもつ建物であったことが判明した。

4 布石

布石は砂岩製の切石で、土壇上には合計27個の布石が残っている。このうち19個の布石が原状を留めている。2個の布石を縦に並べて礎石間を連結する方法が原則としてとられ、礎石との連結部は弧状に切り取られて礎石との密着が図られている。他の端は布石同志を接続するため、直角に仕上げられている。

ほとんど全ての布石に整形時の粗いノミ痕を有するが、建物外面に相当する外側面と上面外半部にはノミ痕が残らず、平滑な面に仕上げられている。

ほぼ原形を留めるものでは長さ104cm～32cm、幅25cm～21cm、厚さ14cm～10cm。ただし、長さには変化があるものの、幅では23cm、厚さでは13cmが最も多く、幅と厚さには一定の規格が設



第4図 西格発掘遺構全体図

分られていたようである。布石上面の平均高は海拔5.25mで、礎石上面平均高より約5cm低い。

5 建物規模

梁行3間、桁行4間の南北棟で、建物内部に4本の入側柱をもつ。建物方位は北で東へ23度寄る。梁行、桁行とも柱間寸法は均等で、1間186cm(6尺1寸5分)等間に復原され、梁行総長5.58m(1丈8尺4寸5分)、桁行総長7.44m(2丈4尺6寸)である。

第2表 西櫓礎石計測表

礎石番号	長径(cm)	短径(cm)	上面高(cm)
老一い	55	47	-35.0
老一は	58	46	-33.6
老一ほ	65	52	-36.0
老一と	57	53	-34.0
老一り	52	52	-34.5
参一い	58	51	-28.7
参一り	66	46	-31.7
五一い	61	57	-29.8
七一い	57	52	-30.5
七一は	62	52	-31.4
七一ほ	62	48	-31.8
七一と	62	43	-33.2
遊一1	58	53	—
遊一2	58	51	—

注1遊一1・2は土壇上に遊離して存在する礎石。

2上面高は海拔5,600mを基準とした数値。

第3表 西櫓礎石あたり痕跡計測表

礎石番号	幅(cm)	長さ(cm)	方向	備考
老一い	17~20	38	東西	隅
	15~23	37	南北	
老一は	19~21	42	南北	桁行
老一ほ	17~21	46	南北	桁行
老一と	20	37	南北	桁行
老一り	無	無	不明	隅
参一い	17~20	37	東西	梁行
参一り	12~21	52	東西	梁行
五一い	19~21	55	東西	梁行
七一い	18	36	南北	隅
	不明	32	東西	
七一は	16~20	46	南北	桁行
七一ほ	17~20	42	南北	桁行
七一と	15~21	50	南北	桁行
遊一1	18	24	不明	不明
遊一2	12~18	30	両者 直交	不明
	12~19	46		

第4表 西櫓布石計測表

No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
東側柱列	1	59	24	ほぼ完形
	2	73	24	ほぼ完形
	3	56	24	ほぼ完形 天地逆
	4	49	23	欠損
	5	87	25	ほぼ完形
	6	72	25	ほぼ完形
	7	64	24	ほぼ完形
西側柱列	1	(98)	23	3倍に分権
	2	49	24	一部欠損
	3	71	25	ほぼ完形
	4	76	23	欠損
	5	38	24	欠損
	6	92	25	ほぼ完形
	7	30	24	ほぼ完形
	8	99	19~25	ほぼ完形 風状折りなし
南側柱列	1	54	24	ほぼ完形
	2	87	24	ほぼ完形
	3	44	19	12
	4	84	24	11
	5	72	24	13
	6	86	24	11
北側柱列	1	84	25	ほぼ完形
	2	51	22	欠損
	3	24	23	12
	4	102	25	13
	5	38	24	15
	6	105	24	15

第2節 東 檜

東面上屋北端に作られた土壇上に築かれた梁行4間、桁行5間の木造二階建て入母屋造南北棟の檜である。明治17年3月3日の木丸火災に際して炎上倒壊したと言われ、礎石のみが土壇上に残っている。

本来28個あった礎石のうち8個が消失し、現在は20個の礎石が残されている。20個の礎石もその多くが原位置から動かされており、礎石間に配されていたと思われる布石も全く残らず、西檜に比べると遺存状況はきわめて悪い。

1 土壇

土壇は上面が東西約15m、南北約12mの平坦面であるが、北端が幅広くなった台形状の平面をなしている。また、上面は完全な水平面をなさず、北が高く南の低いなだらかな傾斜面となっている。

土壇外周は現状で約35度の傾斜をもって広がり、東側の裾部は外堀内岸に接している。

土壇の構築法を調べるため、現地表下約70cmまで掘り下げた。土壇は黒褐色の粘質土を主体に砂層を混えてほぼ水平に盛上されている。盛土層の厚さは2cmから25cmまでであるが、最も多いのは6~10cmである。版築はさほど強固でなく、全体にやや軟質である。

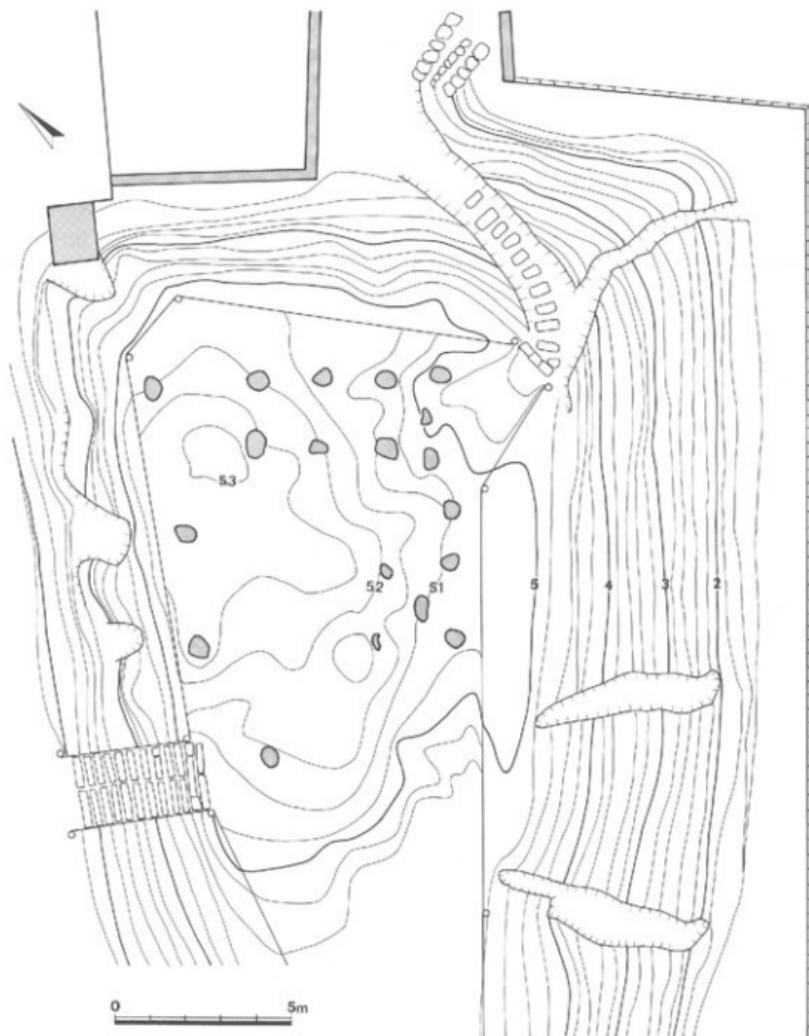
土壇上面の高さは最も高い北端部で海拔5.3mで、本丸原地表面と外堀内岸との比高差はそれぞれ2.3mと3.7mである。しかし、ほぼ原位置にあると思われる礎石と比べると、土壇上面と礎石最下面とがほぼ等しいか礎石最下面の方が数cm高く、本来の土壇上面は現状よりも30cm~40cm高かったと推測される。つまり、明治17年の焼失以後、現在までの間に土壇上面が30cm~40cm削平されたことになる。

2 級石

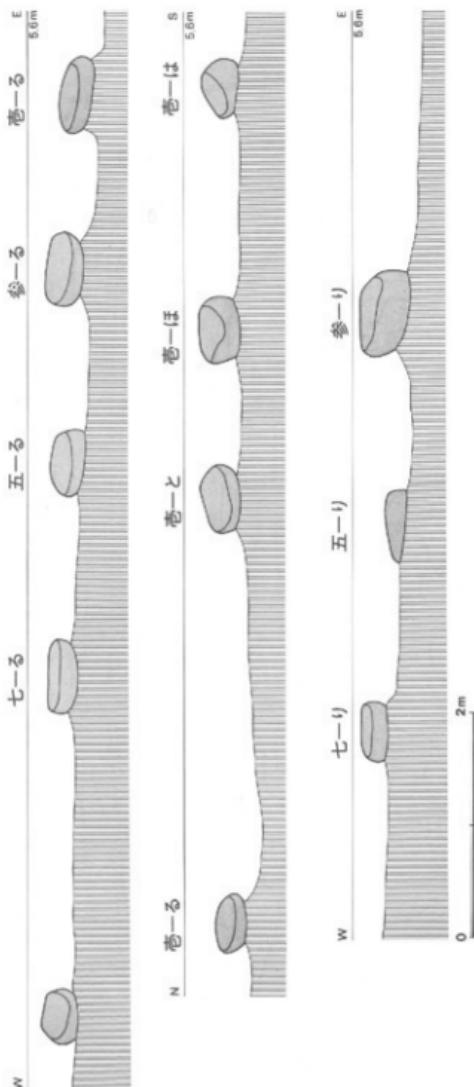
土壇上に残る20個の礎石は西檜と同様、すべて花崗岩あるいは安山岩質の硬質大型の自然石である。しかし、西檜の礎石と比べるとより大型の石が用いられている。特に建物内側に位置する入側柱の礎石のうちほぼ原位置にある3個の礎石は大きく、直径83cm~56cm、短径62cm~40cm、厚さ46cm~29cmで、西檜の礎石より直径、短径とも大きく、とりわけ厚さは西檜礎石の2倍近い数値になっている。ただし、石の使い方は西檜と変らず、比較的平坦な自然面を上にして据付けている。

西檜の礎石と同じく、東檜の礎石にも土台のあたり痕跡が認められる。しかし、あたり痕跡は西檜の礎石ほど明瞭でなく、東西両檜の施設時期の差を暗示している。あたり痕跡の最大幅25cm、最大長41cm。

遺構の遺存状況の悪さを示すように、礎石上面の高さは全て異なり、高低差は最高29cmに達



第5図 土浦城東櫓周辺地形図



第6図 東檻礎石断面図

しく、掘形の規模、形状の不明な部分が多いが、確認できた範囲では掘形は布堀りで、入側柱

している。しかし、ほぼ原位置にあると思われる礎石のうち、入側の参一、七一の3個の礎石上面の高さは海拔5.59m、5.53mを示し、入側柱礎石上面高が海拔5.55m程度であったと推測される。一方、外側柱の七一、参一、五一、七一の4個の礎石上面の高さは海拔5.33m、5.37m、5.38m、5.34mで、礎石上面高が海拔5.38m程度であったと推測される。

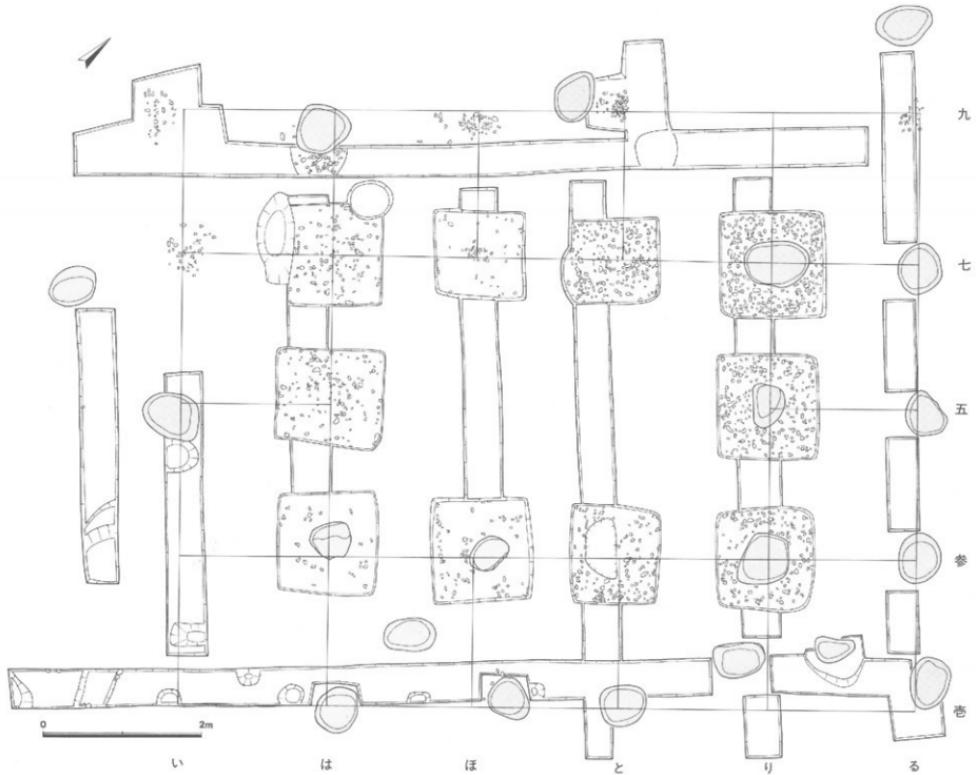
現状で測定する限り、入側礎石と外側礎石では約20cmの高低差が認められるが、これが本来のものか外側礎石の沈下によるものかはなお検討の余地を残している。

また、入側礎石の上面高を海拔約5.55mであったとすると本丸現地表面との比高差は2.8mとなる。

3 種石掘形

土壇上面に設定した14本のトレンチで、合計18ヶ所の礎石据付用の掘形を検出した。全て土壇上面から掘り込まれ、掘形底部から拳大以下の大きさの砂利と粘質土を互層に積み上げ、版築によってきわめて堅固に錆き固められている。この版築上の土に礎石を直接据付けているが、身舎部にあたる入側と外周の外側とでは規模、工法に相違がみられる。

外側の礎石掘形は総体に攪乱が激



第7図 東櫓発掘遺構全体図

を囲むように「口」の字状に巡っていたと考えられる。布掘りの幅は約50cm、深さ約60cmである。

入側の10個の礎石掘形は平面形がほぼ正方形で、一辺130cm～110cm、深さ80cm～45cmを測り、外側柱礎石掘形に比べると格段に大きい。

また、入側柱礎石掘形では、外側柱礎石掘形や西櫓礎石掘形には見られなかった、特殊な工法が用いられていた。掘形底部に水平に並べられた丸太材と丸木を用いた堅杭で、入側柱礎石掘形10ヶ所中、底部まで掘り下げた3ヶ所の掘形において検出した。

丸太材、堅杭ともに部材は腐朽していたが、部材の輪郭が空洞となって完全な形で痕跡を留めていた。

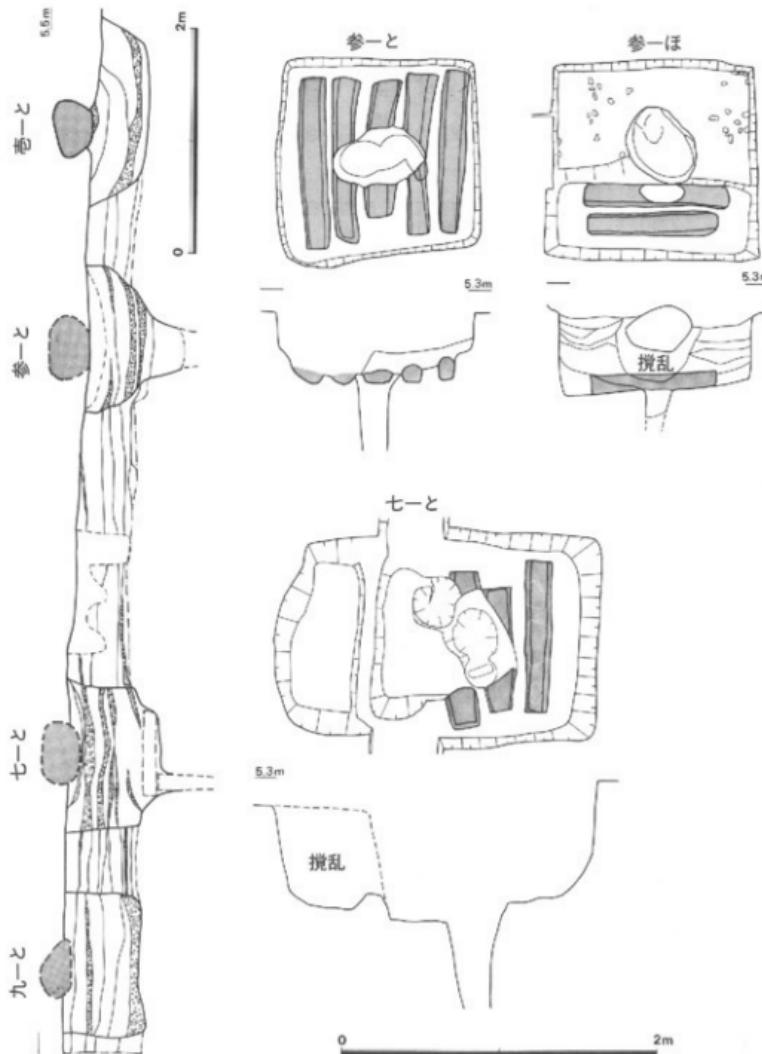
丸太材は掘形底面に水平に並べられており、掘形全体を掘り下げた「参一」と「七一」との2ヶ所ではそれぞれ5本、3本で、掘形の二分の一を掘り下げた「参一は」では2本を検出した。丸太材はいずれも両端を材の方向に対して直角に切り落されており、平坦面をなし、鋸によつて切断されたと推測される。掘形底面中央部に埋置され、樹皮付きの黒木か樹皮を剥いだ白木かは判断できなかった。直径18cm～9cm、長さ110cm～78cm。

堅杭はいずれも礎石掘形中央部に垂直に打ち込まれていた。掘形全体を底面まで掘り下げた「参一」と「七一」とでは共に堅杭は3本で、掘形の二分の一を底まで掘り下げた「参一は」では堅杭は1本である。丸太材との関係から堅杭の上端は掘形底面の高さに揃えられていたと想定される。堅杭の下端まで掘り下げることができなかつたため、堅杭の縱断面形については不明であるが、上端が水平な平坦面、下端が尖ったものと推測している。直径28cm～10cm、長さ最大55cm以上。黒木か白木かは不明である。

以上の事から入側柱礎石の掘付方法を復原すると以下のようなになる。

- 1 上端上面から掘形を掘る。
- 2 掘形底面中央部に堅杭を打ち込む。堅杭の上端の高さは掘形底面の高さと合わせる。
- 3 堅杭および掘形底面の上に丸太材を並べる。
- 4 丸太材の上に砂利と粘質土を互層に積みながら版築で掻き固める。
- 5 版築土上に礎石を上面が一定の高さになるよう設置する。
- 6 磂石周辺を版築しながら掘形上面まで掻き固める。

堅杭が掘形底面中央に打ち込まれているのはその真上に礎石が位置するためであり、礎石を通して掘形版築上にかかる建物の荷重を丸太と堅杭が最終的に受ける構造となっている。外側柱礎石掘形の規模が小さく、丸太事業が見られないことは、入側柱礎石が如何に大きな荷重を前提に設計されていたかを示すものであり、西櫓にこの種の工法が施されていないことから、東櫓が西櫓に比べて格段に規模の大きい建物であったことを裏付けるものといえよう。



第8図 東橋土壇断面部北面断面図

第9図 東橋丸太地栄平面図及び断面図

4 建物規模

梁行4間、桁行5間の南北棟で、建物内部に梁行2間、桁行3間の入側柱をもつ。建物方位は北で東へ43度ふっている。

西櫓のように原位置を保つ礎石がきわめて少なく、柱位置を示すものとしては礎石据付用の掘形がほとんどであるため、厳密な寸法の計測が困難であるが、梁行4間等間、桁行5間等間で復原でき、梁行、桁行とも1間は西櫓と等しく6尺1寸5分(186cm)で割付けることができる。梁行総長7.44m(2丈4尺6寸)、桁行総長9.30m(3丈7寸5分)。

第5表 東櫓礎石計測表

礎石番号	長径(cm)	短径(cm)	上面高(cm)	礎石番号	長径(cm)	短径(cm)	上面高(cm)
巣一は	60	51	-20.5	五一る	56	52	-22.0
有一は	55	49	-13.5	七一り	83	59	-7.0
巣一と	58	52	-5.0	七一る	65	56	-16.0
巣一る	65	50	-27.5	九一は	64	63	-9.0
参一は	52	46	-28.5	九一と	68	50	-2.0
参一ほ	53	39	-25.0	他一1	73	51	-13.0
参一り	65	62	-5.0	他一2	65	45	-13.0
参一る	65	53	-23.0	他一3	65	43	-14.0
五一い	75	58		他一4	63	48	-13.0
五一り	56	40	-31.0	他一5			

注1 他--1~5としたものは柱筋から大きく外れた礎石

2 上面高は海拔5.6mを基準とした高さである。

第6表 東櫓礎石あたり痕跡計測表

礎石番号	幅(cm)	長さ(cm)	方 向	備 考
巣一と	21~25	36	南北	桁行・原位置
巣一は	25	41	東北	桁行
参一る	22~23	45	東北	梁行
参一り	24~27	51	東西	入隅・原位置
五一る	25	31	東北	梁行
五一り	20~26	28	東西	梁行・原位置
七一る	18~24	52	東西	梁行・原位置
九一と	19~23	41	東西	桁行
九一は	25	35	東西	桁行

第7表 東櫓丸太地業計測表

掘形位置	丸太堅杭	直径(cm)	長さ(cm)
参一と	丸太1	17	110
	丸太2	16	105
	丸太3	17	88
	丸太4	16	102
	丸太5	18	104
	堅杭1	23	31以上
七一と	堅杭2	18	
	堅杭3	10	
	丸太1	16	95
	丸太2	15	78
	丸太3	17	96
	堅杭1	28	
参一ほ	堅杭2	28	55以上
	堅杭3	21	
	丸太1	9	82
丸太2	丸太2	16	91
	堅杭1	27	16以上

第3節 土 壁

東西約80m、南北約40mの隅丸長方形を呈する本丸を囲む土壁の規模、形状、構築法を解明するため、3ヶ所にトレーンチを設定し、発掘調査を行なった。ただし、明治以後ほぼ全城が破壊され、その後現在のように復原されたと伝えられる北面土壁および南面土壁は調査対象地から除外した。また、3ヶ所のトレーンチには発掘調査の順序に従って、第1トレーンチ、第2トレーンチ、第3トレーンチと命名した。

1 第1トレーンチ

本丸土壁西北隅に設定した幅1.5m、長さ15mのトレーンチで、土壁を中心とし、土壁両端は本丸の一部と外堀内岸に及んでいる。

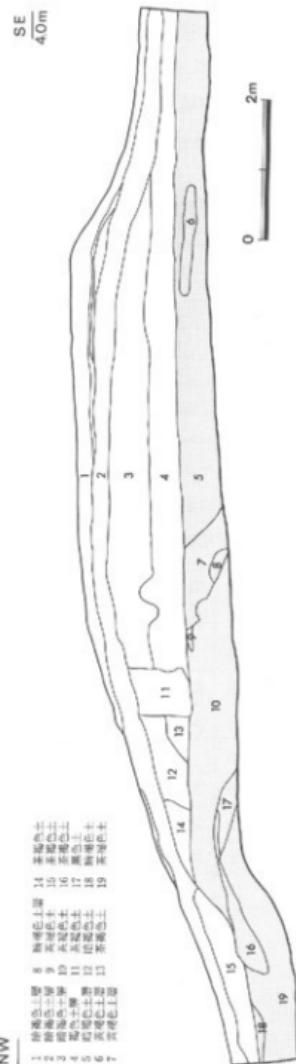
調査の結果、予想以上に擾乱が厳しく、土壁現上面下2.2mまで掘り下げたが、土壁その他土浦城の遺構に類するものは全く検出できなかった。しかし、現在の土壁には大きく2回にわたる盛土がなされていること、本丸部では現地表下約40cmで明治以前の遺構面に達することを確認することができた。

第1トレーンチ内からは近・現代の陶磁器やガラス片に混って、瓦、土器、鉄釘などが出土した。

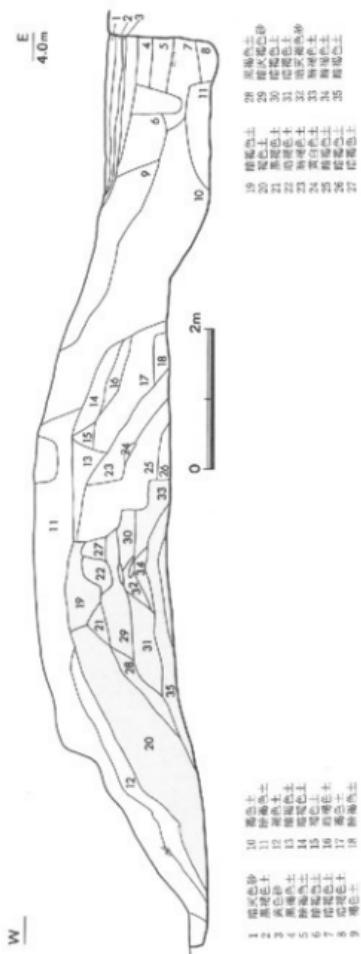
2 第2トレーンチ

第1トレーンチで遺構に類するものが検出できなかつたため、西面土壁上に設定した幅1.5m、長さ13mのトレーンチで、西櫓の北約10mに位置し、トレーンチ両端は本丸の一部と外堀内岸に及んでいる。

調査の結果、第1トレーンチ同様、ここでも擾乱が厳しく、本丸側では土壁上面から1.9mの深さまで掘り下げたが、土壁その他、土浦城に関係する遺構は検出できなかつた。ただし、外堀側では土壁の盛土がごく一部ではあるが残っていた。



第10図 土壁第1トレーンチ北面上層図



第11図 土壌第1トレンチ北面土層図

土壘の西端部と本丸の一部を掘り下げた結果、本丸現地表下1.5mで土浦城築城当時の旧地表面と思われるやや平坦な地盤を検出した。この地盤面は海拔1.5mで、一部に焼土面を有し、この直上から繩文土器が1点出土した。この地盤面から上には厚さ約60cmの盛土があり、この盛土層の上に十畳の盛土が行なわれている。盛土層の上面はほぼ水平で、土浦城築城に際してま

土塁の盛土は暗褐色ないし黒褐色を呈する粘質土で、東西両櫓の土塙盛土と近似している。残存土塁上面高は海拔3.54mで、本丸旧地表面との比高差は0.8mである。

第1トレーナ内からは、瓦、陶磁器、銅製品などが出土した。

3 第3トレンチ

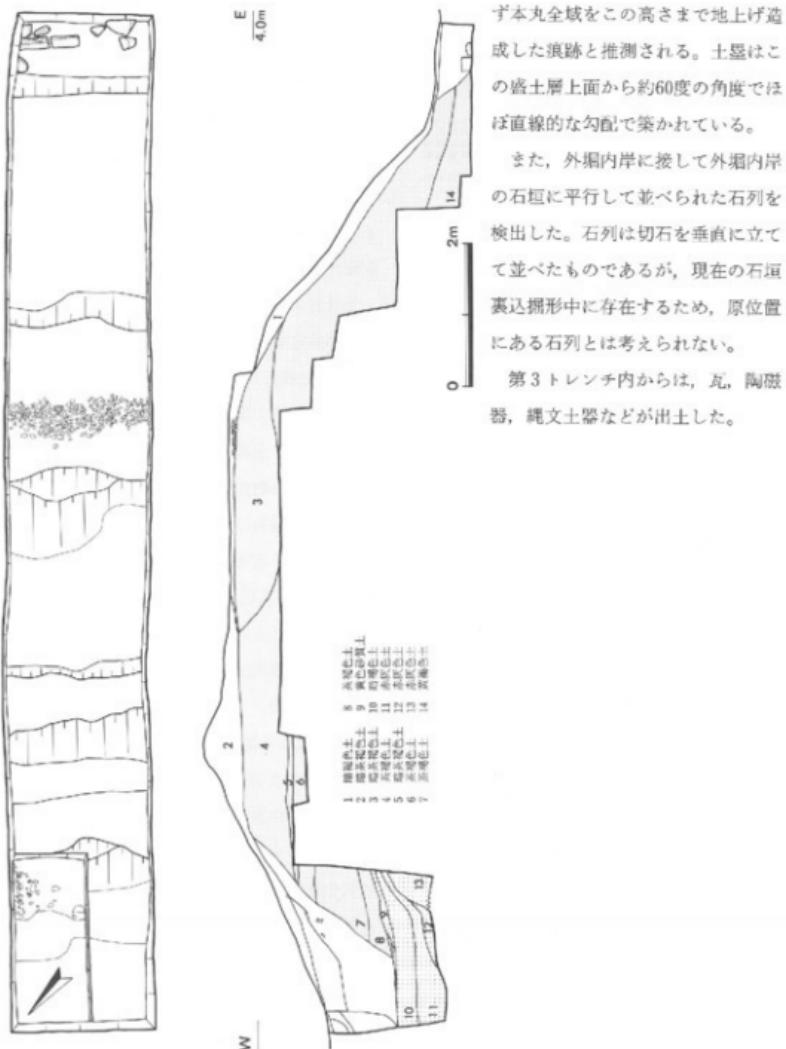
東面土塁の中央やや南寄りに設定した幅2m、長さ15mのトレンチで、土塁を中心にしてトレンチの両端は本丸の一部と外堀内岸に及んでいる。東櫓の南約15mに位置し、明治時代まで残っていた鐘楼のすぐ南にある。

調査の結果、土壘上面の現地表下約15cmで幅広い平坦面と石敷遺構、本丸側のトレーナー西端で土浦城築城以前の旧地表面を検出した。

土壠上面の平坦面は幅6.5mで、最も高い部分で海拔4.2mを計り、本丸原地表面および外堀内岸との比高差はそれぞれ1.2mと2.8mである。

石敷遺構は拳大以下の小円礎を密集して溝状に並べたもので、土壘上面平坦面の外堀側上端から内側1.2mの地点を南北に走っている。土壘上面平坦面の本丸側上端との距離は5.3mである。石敷遺構の最大幅70cm、最大厚8cmで、石敷遺構上面と土壘現地表面との間には厚さ15cmの暗褐色粘質土が堆積している。

土蔵城本丸土塁には塀が築かれており、この石敷造構は土塁上の塀の地下事業の可能性が高い。



第12図 土塁第3トレンチ遺構平面図及び土層図

ず本丸全域をこの高さまで地上げ造成した痕跡と推測される。土塁はこの盛土層上面から約60度の角度でほぼ直線的な勾配で築かれている。

また、外堀内岸に接して外堀内岸の石垣に平行して並べられた石列を検出した。石列は切石を垂直に立て並べたものであるが、現在の石垣裏込掘形中に存在するため、原位置にある石列とは考えられない。

第3トレンチ内からは、瓦、陶器、縄文土器などが出土した。

第V章 遺 物

今回、発掘調査を行なった東西両櫓及び本丸土塁から、瓦類、土器類の他に鉄製品、銅製品、石製品、土製品などが少量出土した。そのほとんどでは擾乱層中からの出土であり、明確に遺構に伴なうものはきわめてわずかである。

第1節 瓦 類

瓦類には、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、輪達、版板瓦、鬼瓦などがある。瓦の大部分は破片であり、形態を観察できるものはごく一部に限られている。そのため、ここでは、軒瓦類及び遺存度が高く特徴的な資料のみを報告する。

1 軒丸瓦（第13図1～3）

軒丸瓦の破片が4点あり、いずれも連珠三つ巴文をもつ。

1は巴の頭部と尾の境の明瞭なもので、巴長は長く、断面形は三角形を呈する。色調は銀灰色、胎土は灰色で、金雲母と砂粒を含む。焼成は良好堅緻。瓦当径は15.0cm、文様区径10.4cm、内区径6.7cm、周縁幅1.8cm、周縁高0.6cm、珠文数17個、珠文径0.9cm。土塁第3トレンチ出土。

2も巴の頭部と尾の境が明瞭なもので、巴長は約二分の一周し、断面形はカマボコ状を呈する。色調は銀灰色、胎土は灰色で、雲母と砂粒を含む。焼成は良好堅緻。瓦当径15.4cm、文様区径10.8cm、内区径6.2cm、周縁幅2.3cm、周縁高0.6cm、珠文数14個、珠文径1.2cm。土塁第1トレンチ出土。

3は巴の頭部と尾の境がなく、頭部先端の尖ったものである。巴長は長く、断面形は台形を呈する。色調は黒灰色、胎土は明灰色で、金雲母を含む。焼成は良好堅緻。瓦当径15.0cm、文様区径10.2cm、内区径7.0cm、周縁幅2.3cm、周縁高0.4cm、珠文数12個、珠文径1.0cm。土塁第3トレンチ出土。

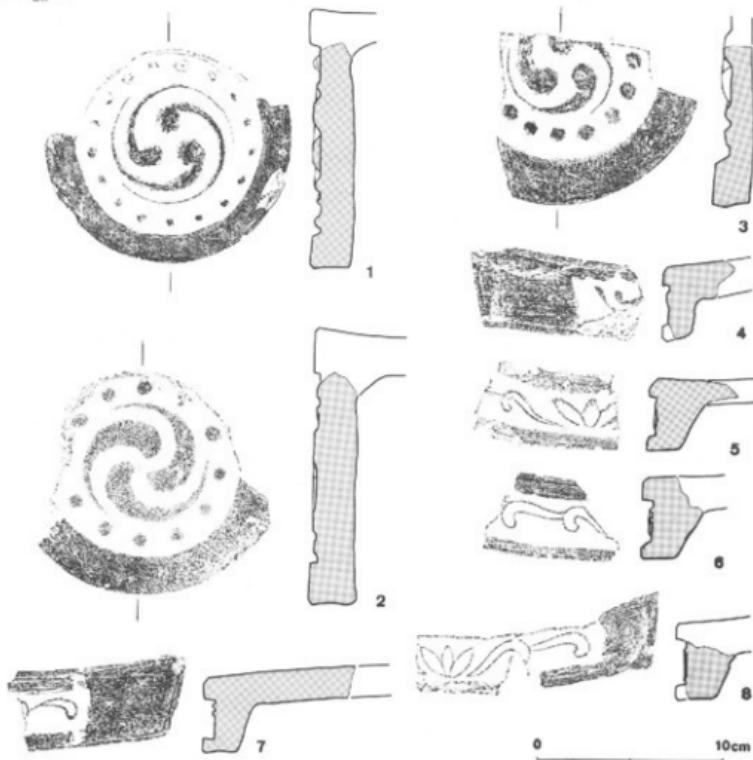
他に、連珠文部のみの小片が土塁第2トレンチから出土している。

2 軒平瓦（第13図4～8）

軒平瓦は5点ある。

4は子葉と唐草のみが残るもので、唐草の先端は丸みを帯びている。色調は暗灰色、胎土は灰色で、白砂を含む。焼成は良軒。瓦当厚4.0cm、文様区厚2.1cm、左周縁幅5.8cm。考察第25図6と同範資料と考えられる。

5～8は中心飾りと唐草2反転の文様で構成されている。中心飾りは三葉、唐草は重線で巻



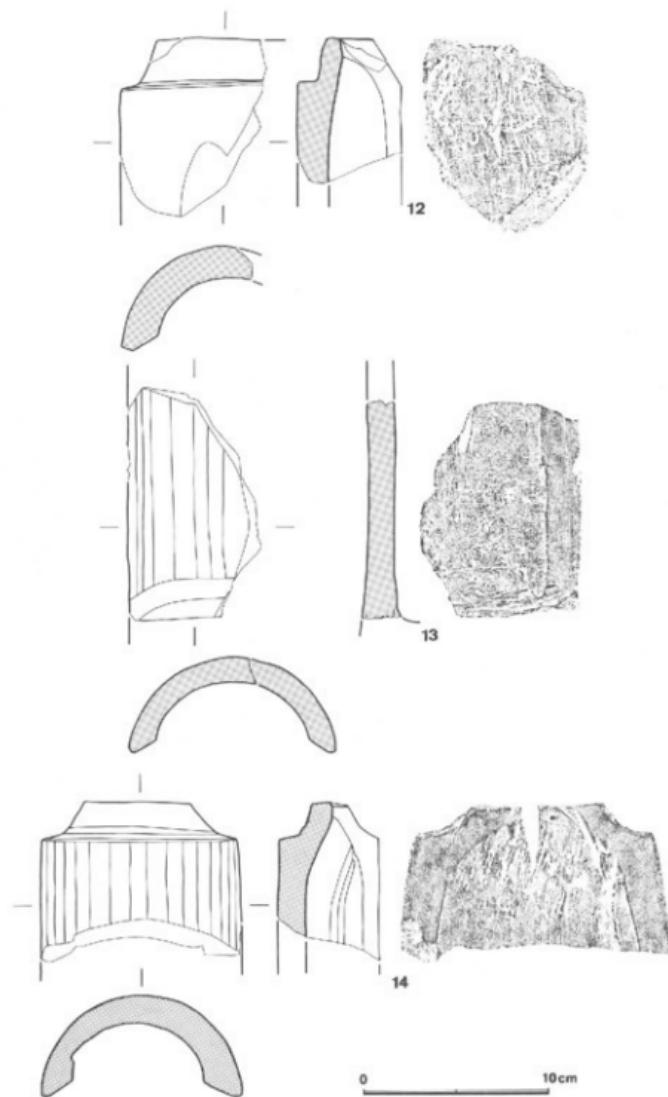
第13図 土浦城址出土軒瓦拓影及び実測図

き込みが少なく、巻き込み先端は丸みを帯びている。5の色調は黒灰色、胎土は明灰色で、金雲母が含まれる。焼成は良好堅緻。瓦当厚4.4cm、文様区厚2.3cm。土壙第3トレンチ出土。6の色調は暗灰色、胎土は灰白色で、金雲母を含む。焼成は良好堅緻。瓦当厚3.9cm、文様区厚2.1cm。土壙第3トレンチ出土。7の色調は黒灰色、胎土は灰色で、白砂と金雲母を含む。焼成は良好堅緻。瓦当厚4.1cm、内区厚2.1cm。土壙第3トレンチ出土。9の色調は黒灰色、胎土は灰色で、金雲母を含む。焼成は良好堅緻。瓦当幅23.4cm、文様区幅19.4cm、文様区厚2.3cm。東櫓W7トレンチ出土。

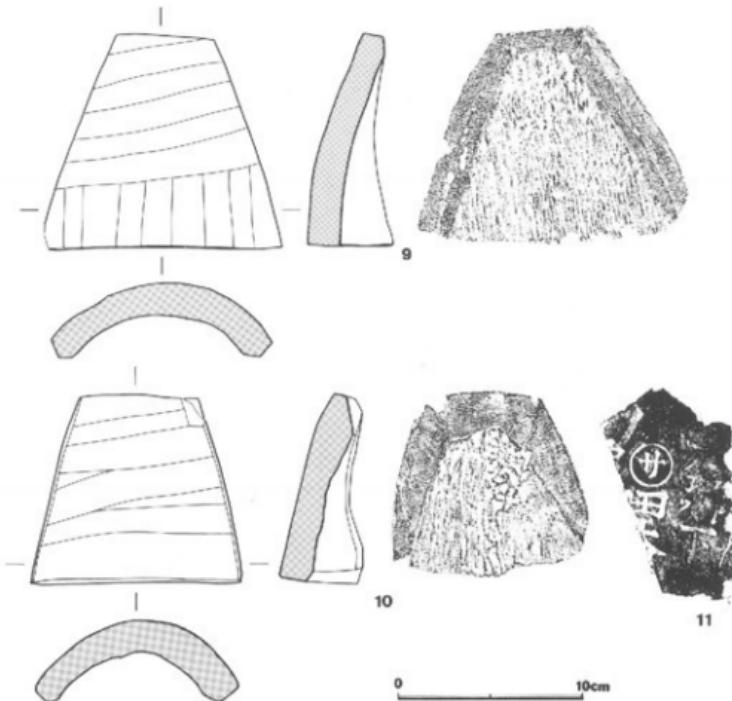
軒平瓦には2筐型あり、5・7が考察第25図2と、6・8が考察第25図1と同范である。

3 丸瓦（第14図12～14）

12は玉縁付近のみが残るもので、玉縁はやや長く、凸面には縦方向のヘラ磨きが施されている。凹面の布袋痕には刺し子が粗に施され、布目が明瞭に観察できる。色調は暗灰色、胎土は



第14図 土浦城址出土丸瓦拓影及び実測図



第15図 土浦城址出土瓦実測図及び拓影

灰白色で、雲母を含む。焼成はやや不良で軟質。玉縁長3.0cm。土壙第3 トレンチ出土。

13は軒丸瓦の丸瓦部で、広端面には瓦当との接合のための櫛目が4条、弧状に施され、凸面には縦方向のヘラ磨きが施されている。凹面の布袋痕には刺し子が1cm間隔で粗に施され、布目が明瞭に観察できる。色調は黒灰色、胎土は黄灰色で、金雲母を含む。焼成はやや不良で軟質。幅15.0cm、高さ7.0cm。土壙第2 トレンチ出土。

14は玉縁の短い丸瓦で、凸面には縦方向のヘラ磨きが施されている。凹面の布袋痕は刺し子が密に施されているが、中心部分は押し潰されて不明瞭である。布袋は両端のみが閉じられているため、模骨痕が左側寄りにみられる。色調は黒灰色、胎土は暗灰色から黄灰色で、金雲母を含む。焼成はやや不良で軟質。幅14.4cm、高さ7.3cm、玉縁長2.3cm。玉縁幅7.6cm。土壙第2 トレンチ出土。

4 輪違い（第15図9・10）

株込み瓦として使用された平面台形状の瓦で、丸瓦を焼成前に横位に分割して製作している。

9は丸瓦の胴部を用いて作られたもので、凸面の短辺寄りを横方向にヘラ磨きしている。凹面には面取りが側縁に2回、短辺側に1回施されている。布袋痕は刺し子が密に施され、刺し子の間の布目が明瞭に観察できる。色調は黒灰色、胎土は黄灰色で、金雲母と白砂を含む。焼成はやや不良で軟質。長さ11.5cm、短辺5.3cm、長辺13.0cm。土壙第2トレンチ出土。

10は丸瓦の玉縁部を用いて作ったもので、凸面には横方向のヘラ磨きが施されている。凹面には面取りが側縁に2回、短辺と長辺に各1回ずつ施されている。布袋痕は刺し子が密に施され、布と粘土筒の密着力を強化するための紐のあと、いわゆる抜き取り紐の痕跡がみられる。色調は黒灰色、胎土は灰色で、金雲母を含む。焼成は良好。長さ10.2cm、短辺6.2cm、長辺11.4cm。東櫓W7トレンチ出土。

5 塀板瓦（第16図15・17）

長方形の板状を呈し、片側の側縁に棟部が接合され、隣接する塀板瓦と重なる構造をとる。

15は平部表面側縁寄りに断面三角形の水切り溝が走り、棟寄りに一辺0.8cmのほぼ正方形の釘穴が一対あく。棟部は右側に接合され、平部と棟部の接合は補足粘土を多量に使用しているため、接合部がなだらかに形成されている。裏面には軽寄りに突起があり、滑り止めとしている。色調は黒灰色、胎土は灰色で、金雲母を含む。焼成は良好。長さ38.7cm、全幅32.2cm、平部幅27.0cm、棟部幅6.6cm。上壙第2トレンチ出土。

17は棟部が右側につき、補足粘土をあまり使わず接合されている。釘穴は1ヶ所のみ遺存し、一辺0.8cmのほぼ正方形を呈している。色調は黒灰色、胎土は灰色で、金雲母を含む。焼成は良好堅敏。棟部幅は6.0cmで、15よりも幅が狭い。土壙第2トレンチ出土。なお、同型式の塀板瓦は第2トレンチを中心に10点近く検出されている。

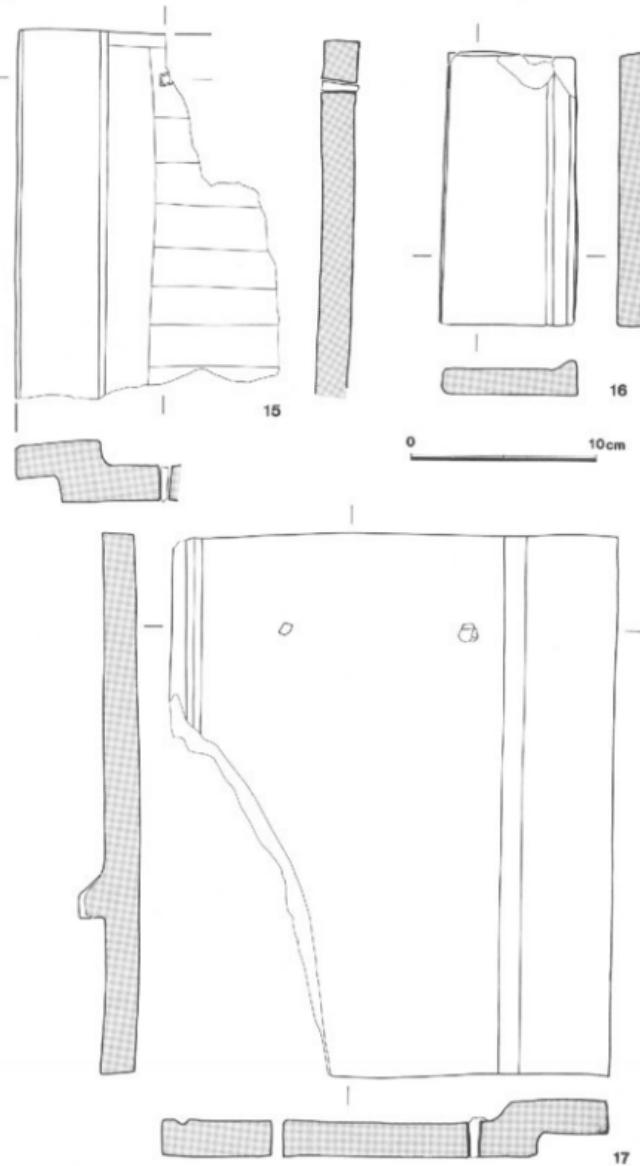
6 不明品（第16図16）

長方形を呈し、長辺の片側の裏面に突起のあるものが、土壙第2トレンチから3点、土壙第3トレンチから2点出土した。

16は長辺19.7cm、短辺9.8cm、厚さ1.9cm、突起の厚さ0.7cmで、表面には丁寧なヘラ磨きが施されている。土壙第2トレンチ出土。

7 刻印（第15図11）

刻印は丸瓦にみられ、同印の資料が土浦藩校郁文館正門の解体修理に際して検出されている。右上から横に筑^{アキ}波小田村下人島と一段に3文字づつ3段にみられる。



第16図 土浦城址出土擲板瓦実測図

第2節 土 器 類

1 磁器（第17図1・3～18）

磁器の大部分は土墨第1トレンチ及び土墨第2トレンチの擾乱層から検出されたものであり、ガラス片などを併ない、ほとんどが明治以後の遺物である。また、破片が多くいたため、ここでは遺存度が良い資料と特徴的な資料のみを報告する。

まず、江戸時代に遡る資料は肥前産の碗(7)のみで、具須によって染付されている。

他の染付は瀬戸・美濃産の製品で、3は明治10年頃に生産が始まった型紙刷りによるもので、コバルトによる染付である。10・11・16は明治20年頃に生産が始まった銅版刷りによるものである。この他には色絵が数点みられる。

高台で特徴的なものに15と16がある。中央に凹状の窪みがあり、明治末期頃から製作された資料である。また、明治期からみられるようになった端反が数点ある（4・9・11・13・14）。器種はほとんどが碗か盃であり、特殊なものとして17のような仏器がある。

2 陶器（第17図2・19～22）

陶器も磁器と同じく土墨第1トレンチ及び土墨第2トレンチから検出された資料が多く、大部分が破片であった。擾乱層からの出土であり、ここでは器種判定の可能な資料のみを取り上げた。

器種としては鍋身（2）、甕（22）、擂鉢（19・21）、土瓶（20）がある。このうち、土瓶には灰釉の地に山水画が描かれており、益子焼きの可能性がある。

3 土器（第18図23～45・第19図46～50）

土器のはほとんどがかわらけであるが、縄文土器も1点ある。

かわらけには口径12cm以上の大型品、口径9.0cm～11.9cmの中型品、口径7.0cm～8.9cmの小型品の3種がある。このうち、小型品と中型品には器壁が厚く、ロクロの成形痕を明瞭に残すものが多い。すべて切高台風の擬似高台をもち、糸切りのままで残されている。胎土中に金雲母を含み、在地産の可能性が高い。

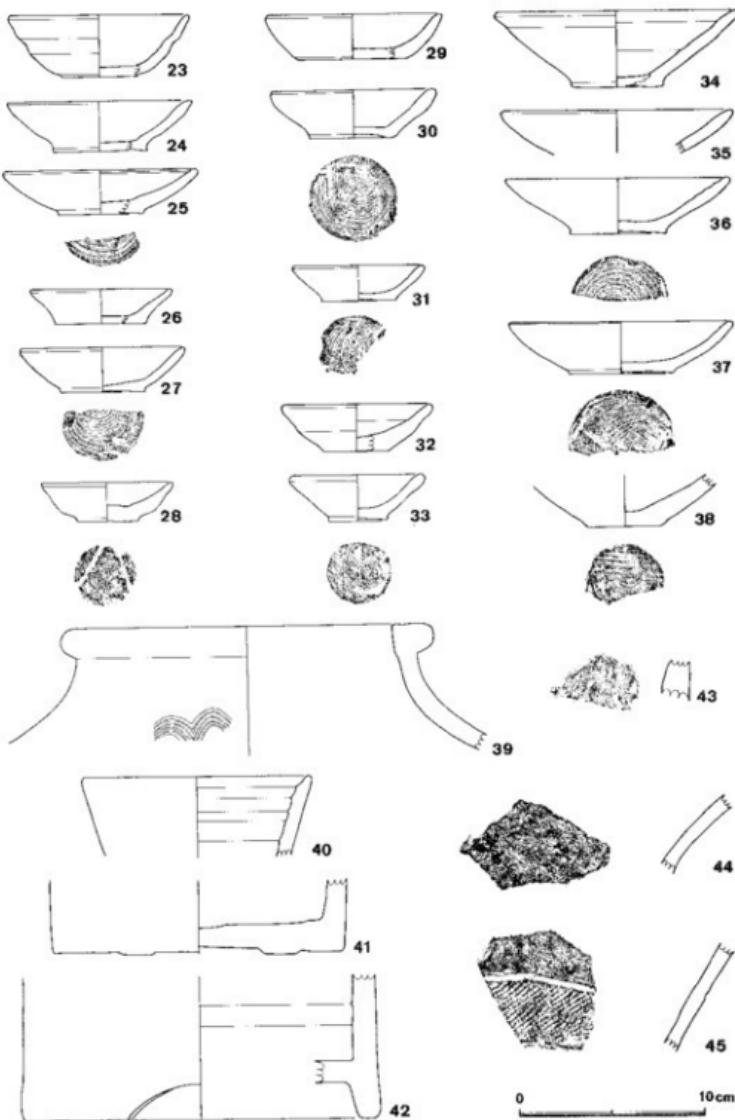
大型品は器壁が薄く、ロクロの成形痕も明瞭でなく、小型品や中型品とは様相を異にしている。いずれも擾乱層からの出土であり、年代ははっきりとわからない。

他の土器としては擂鉢（44）、甕（39・47）、火鉢（42）、焼き塙壺（43）があり、瓦質土器には火鉢（41・46）、コンロ類（48～50）がある。

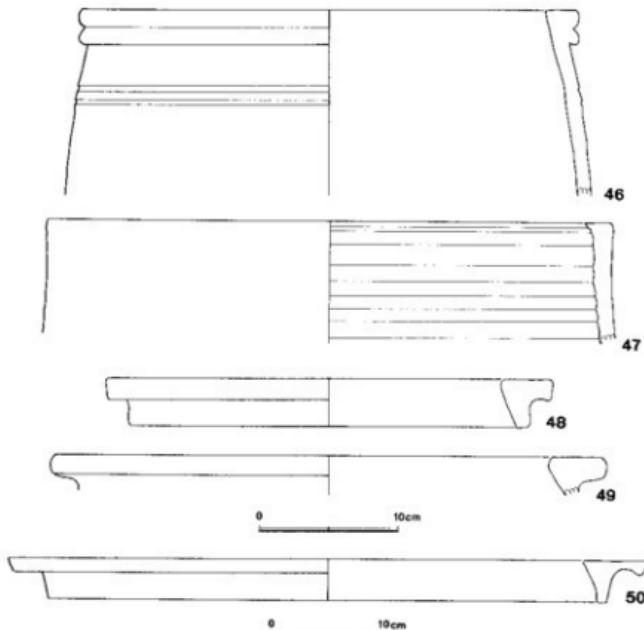
縄文土器（45）は土墨第3トレンチ本丸側断剖部の土浦城築城以前の旧地表面と考えられる平坦面から出土したもので、縄文時代後期後半の加曾利B式に属する。



第17図 上浦城址出土陶磁器実測図



第18図 土浦城址出土土器実測図



第19図 土浦城址出土土器実測図

第3節 その他の遺物

瓦、陶磁器、土器以外に鉄製品、銅製品、石製品、土製品が少量出土した。

1 鉄製品（第20図1～8・10・11）

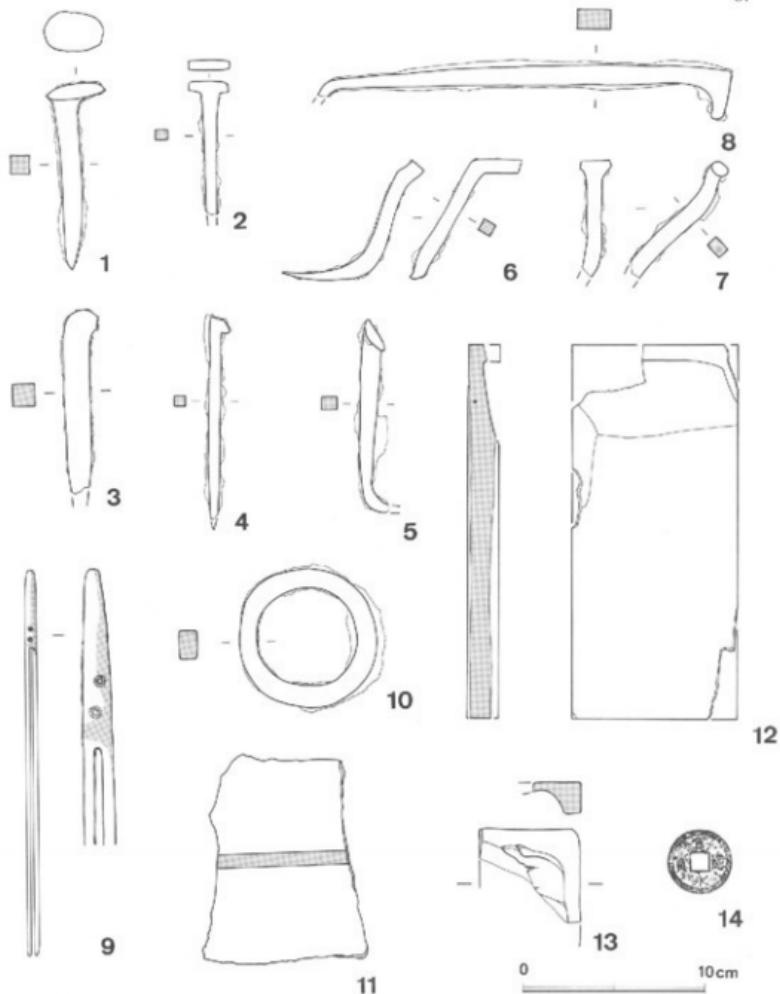
鉄製品には釘（1～7）、鎧（8）、環状鉄製品（10）、台形状鉄片（11）がある。

釘はいずれも角釘で、1・3は一辺0.7cmの正方形の断面形を呈し、1には平面たまご状の頭部が遺存している。2・4は一辺0.5cmの正方形の断面形を呈し、2と7にはT字状の頭部が残っている。1・3は丸瓦用、2・4～7は御板瓦用と考えられる。

鎧は両端が直角に曲がり、先端にむかって薄くなっていく。長さ15.2cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm。環状鉄製品は径5.2cmの環状を呈し、断面形は1.0cm×0.7cmの長方形をしている。

台形状鉄片は台形状を呈する用途不明品で、片側が欠損している。長さ7.1cm、短辺4.3cm、長辺6.5cm、厚さ0.5cm。

1・2・8・10・11が土塁第1トレンチ、3・5が土塁第2トレンチ、4が西櫓NSO—2トレンチ、6・7が西櫓NSO—3トレンチ出土。



第20図 土浦城址出土金属器・石製器・土製品実測図

2 銅製品(第20図 9・14)

銅製品には簪(9)と銭貨(14)がある。簪は頭部に14弁の菊花文が2ヶ所残されているが、上端部の腐食が進み、文様は判然としない。長さ14.0cm、頭部長2.8cm、頭部幅0.4cm。土壙第2トレンチ出土。

銭貨は新寛永に属する寛永通宝である。裏面の腐食が進みはっきりしないが、表面の字体から文錢と考えられる。土墨第1トレンチ出土。

3 石製品（第20図12）

石製品には硯がある。表面の剥離が激しく、海部が若干確認できる程度であるが、縁泥片岩製の長方形硯である。長さ13.6cm、幅6.0cm。土墨第2トレンチ出土。

4 土製品（第20図13）

土製品には人形の型（13）がある。頭部と手部が遺存しており、胎土は黄褐色で、雲母と赤褐色粒子が含まれている。焼成は良好。厚さ1.2cm。土墨第1トレンチ出土。

第8表 陶磁器観察表

底 No.	山 + 地点	材質	器種	底量 (cm) 口径×底径×高さ	特徴				道存度	推定 生産地	時 期
					K	火台	M縫	S成形調整 Y軸			
1	第1トレンチ	磁器	色絵柄	13.2×—×—	T:白色光沢	Y:赤絵模具			1/3	不明	不明
2	第1トレンチ	陶器	灰釉鍋 (身)	12.0×8.0×4.5	T:赤褐色	K:無地	Y:灰釉・鉄輪		1/5	不明	不明
3	第2トレンチ	陶器	紙吹付 柄	11.8×3.8×5.0	T:白色緻密	Y:コバルト			2/3	鶴戸・ 美濃	明治10年頃 ～大正初
4	表探	磁器	青釉碗	11.2×3.8×6.0	T:灰色緻密	S:潮反り	Y:青釉		1/5	不明	不明
5	第1トレンチ	磁器	色絵碗	9.2×3.2×4.4	T:白色光沢	Y:赤・緑・黄色組具			1/2	鶴戸・ 美濃	不明
6	第2トレンチ	磁器	染付盃	6.0×2.4×4.5	T:白色光沢	S:角型・体部凹取り	M:	Y:コバルト	2/5	鶴戸・ 美濃	明治10年頃 ～明治末
7	第2トレンチ	磁器	染付碗	7.0×—×—	T:白色緻密	Y:無地			1/4	肥前	18世紀
8	第1トレンチ	磁器	白磁盃	7.8×3.0×3.3	T:白色緻密	K:米白台			1/2	鶴戸・ 美濃	大正以降
9	第1トレンチ	磁器	青磁染付 青磁染付	7.8×3.6×4.5	T:灰色緻密	S:潮反り	Y:クロム青磁・コバルト・鉄輪具		1/2	不明	大正以降
10	第2トレンチ	磁器	紙版染付 柄	10.8×3.6×5.3	T:白色光沢	Y:コバルト			2/5	鶴戸・ 美濃	明治20年頃 ～明治末
11	第2トレンチ	磁器	紙版染付 笠	6.4×3.2×4.5	T:白色光沢	S:潮反り・角脚・体部凹取り	Y:コバルト		はづき 鶴戸	明治20年頃 ～明治末	鶴戸・ 美濃
12	第1トレンチ	磁器	色絵青磁 (墨石)	5.8×3.8×—	T:白色光沢密	K:貼付け	Y:クロム 青磁・企影		2/3 以上	不明	小明
13	第1トレンチ	磁器	色絵盃	5.8×3.0×5.0	T:白色光沢	S:潮反り	Y:黒色絵脚・見たはコバルト		2/5	鶴戸・ 美濃	
14	第2トレンチ	磁器	染付盃	5.4×2.6×3.7	S:端反り	Y:コバルト			3/5	鶴戸・ 美濃	明治末～大正 ～昭和初
15	第3トレンチ 上而壁上	磁器	染付茶碗	7.8×3.2×4.4	T:白色緻密	K:中央凹状像み・無輪	Y:コバルト		はづき 鶴戸	明治末～大 正	
16	第2トレンチ	磁器	紙版染付 系縄	7.6×4.0×4.5	T:白色光沢	K:中央凹状像み・無輪	Y:コバルト		はづき 鶴戸	明治末～大 正	
17	表探	磁器	色絵伝粉 器	5.4×4.6×5.8	T:白色光沢	Y:赤色絵具	E:台脚内 面無輪		1/2	鶴戸・ 美濃	小明
18	第2トレンチ	磁器	色絵塊	11.4×4.0×4.3	T:白色緻密	Y:コバルト・クロム系 色絵具			1/3	鶴戸・ 美濃	明治末～大 正
19	第1トレンチ	陶器	藍鉢	22.0×—×—	T:灰色	Y:鉄輪	(口部部・体部外側)		鉢片	鶴戸・ 美濃	19C
20	第2トレンチ	陶器	色絵土瓶	8.2×7.6×9.2	T:赤褐色	K:無地	Y:灰釉・鉄輪・ 緑色・黒色絵具		1/3	丸子	明治以降
21	第1トレンチ	陶器	藍鉢	—×—×—	T:乳白色	Y:鉄輪			鉢片	不明	不明
22	第3トレンチ	陶器	甕	—×10.8×—	T:黒褐色絵術	K:割り出し	Y:鉄輪 E:焼成時の灰付着物・漆黒色		鉢片	不明	不明

第9表 土器観察表(1)

No.	出土地点	材質	器種	法蓋(cm) 口径×底径×脚高	張 長筒台 B使成 C色調 Eその他	T胎土 S或形脱型 Eその他	遺存度	措定 生産地	時期
28 実地 SNトレンチ	土器	かわらけ		7.2×3.3×2.1	T: 黄褐色。金雲母・砂粒を含む。S: ピクロモルブ無調整。E: ロクモルブ無調整。	1/2	在地處?	不明	
31 第2トレンチ	土器	かわらけ		7.2×4.1×1.9	T: 黄褐色。金雲母を含む。S: 岩層が薄い。K: ロクモルブ無調整。E: ロクモルブ無調整。	1/2	在地處?	不明	
32 第1トレンチ	土器	かわらけ		8.3×3.6×2.5	T: 黄褐色。金雲母・砂粒を含む。S: ピクロモルブ無調整。E: 岩層が厚い。B: 灰色。	1/5	在地處?	不明	
33 第1トレンチ	土器	かわらけ		7.4×3.2×2.5	T: 黄褐色。金雲母・砂粒を含む。S: ピクロモルブ無調整。E: 岩層が薄い。K: ロクモルブ無調整。	1/2	在地處?	不明	
23 第2トレンチ	土器	かわらけ		9.9×—×—	T: 黄褐色。金雲母・長石・赤褐色を含む。S: ピクロモルブ無調整。E: 灰色。	1/5	在地處?	不明	
24 実地 W7トレンチ	土器	かわらけ		10.1×5.1×2.7	T: 黄褐色。金雲母・長石・赤褐色を含む。S: ピクロモルブ無調整。E: 岩層が薄い。K: ロクモルブ無調整。	1/4	在地處?	不明	
25 第2トレンチ	土器	かわらけ		10.6×4.7×2.4	T: 赤褐色。金雲母・長石を含む。S: 直線的な立ち上がり。K: ピクロモルブ無調整。E: ロクモルブ無調整。	1/4	在地處?	不明	
26 第3トレンチ	土器	かわらけ		7.7×4.9×1.9	T: 黄褐色。金雲母・長石を含む。S: 岩層が薄い。K: ピクロモルブ無調整。	1/2	在地處?	不明	
27 第1トレンチ	土器	かわらけ		9.0×4.6×2.4	T: 黄褐色。金雲母を含む。S: 直線的な立ち上がり。K: ピクロモルブ無調整。	1/4	在地處?	不明	
29 第2トレンチ	土器	かわらけ		9.6×6.0×2.4	T: 黄褐色。金雲母を含む。S: 岩層が薄い。K: ピクロモルブ無調整。	1/5	在地處?	不明	
30 第3トレンチ 石敷	土器	かわらけ		9.0×4.5×2.6	T: 黄褐色。金雲母・長石を含む。S: 岩層が薄い。K: ピクロモルブ無調整。E: ロクモルブ無調整。	2/3	在地處?	不明	
34 第2トレンチ	土器	かわらけ		13.8×5.0×4.1	T: 黄褐色。金雲母・赤褐色を含む。S: ピクロモルブ無調整。E: ピクロモルブ無調整。	1/4	在地處?	不明	
35 第2トレンチ	土器	かわらけ		12.6×—×—	T: 黄褐色。金雲母・長石・赤褐色を含む。K: ピクロモルブ無調整。E: ピクロモルブ無調整。	1/3	在地處?	不明	
36 第2トレンチ	土器	かわらけ		12.2×5.2×3.0	T: 黄褐色。金雲母・長石・赤褐色を含む。S: 内面直線的な立ち上がり。E: ピクロモルブ無調整。K: ピクロモルブ無調整。	1/3	在地處?	不明	
37 第2トレンチ	土器	かわらけ		12.2×5.7×2.8	T: 黄褐色。金雲母・長石・赤褐色を含む。K: ピクロモルブ無調整。	1/3	在地處?	不明	
38 第2トレンチ	土器	かわらけ		—×4.0×—	T: 黄褐色。金雲母・長石・赤褐色を含む。S: 岩層が薄い。K: ピクロモルブ無調整。E: ピクロモルブ無調整。	1/3	在地處?	不明	
39 第1トレンチ	土器	甕		19.3×—×—	T: 灰褐色。金雲母・長石・赤褐色を含む。S: 岩層が薄い。E: ピクロモルブ無調整。	破片	在地處?	不明	
40 第1トレンチ	土器	不明		12.2×—×—	T: 赤褐色。長石を含む。S: 内面ピクロモルブ無調整。	破片	不明	不明	
41 第2トレンチ	瓦質 土器	火鉢		—×15.7×—	T: 赤褐色。長石を含む。K: 3足で足前後張り出している。B: 良好な輪郭。C: 銀灰色。	底部のみ	不明	不明	
42 第1トレンチ	土器	火鉢		—×19.0×—	T: 赤褐色。長石・石英石・金雲母を含む。B: 良好。S: 瓦部にくり込みがある。内面糊ナメ。外面ガキ。	破片	不明	不明	

第10表 土器観察表(2)

図 No.	出土地點	材質	器種	法量(cm) 口径×底径×器高	特徴 K高台 T脚土 B焼成 C色調 Eその他	S成形調整 S:内側 T:型打ち面に布口 B:良	遺存度 破片	発 生 場 所	時 期
43	第2トレンチ 土器	陶泥板	— × — × —	T:褐色 B:良			不明	不明	
44	西櫻 NS5トレンチ	土器	括鉢	— × — × —	T:褐色 S:内側に3条の筋溝文	B:良	破片	不明	不明
45	第3トレンチ 石敷	土器	甕	— × — × —	T:赤褐色 S:砂粒を含む B:良	S:繩状工具による沈縫にて区画された LR並行溝文	破片	不明	不明
46	第3トレンチ 瓦質 土器	甕	26.8×— × —	T:黄褐色 S:内面口・石英・長石・赤褐色 粒を含む	B:良好 E:口部と内面に 2条の沈縫		破片	不明	不明
47	第2トレンチ 土器	大鉢	30.6×— × —	T:暗褐色 S:外壁:ガラス E:内面ロクロ投射膜 堅膜	C:内面火熱で縮変		破片	不明	不明
48	第1トレンチ 瓦質 土器	コソロ類	24.0×— × —	T:暗褐色 C:溶化色	E:上面にススが付着する		1/6	不明	不明
49	第2トレンチ 瓦質 土器	コソロ類	29.6×— × —	T:暗褐色 C:黒褐色	E:上面にススが付着する		1/6	不明	不明
50	第2トレンチ 瓦質 土器	コソロ類	43.0×— × —	T:明褐色 C:墨灰色	E:上面にススが付着する B:良好堅膜		1/6	不明	不明

第VI章 考 察

第1節 遺 構

1 西櫓

総計14個の外側柱礎石のうち、既に抜き取られていた2個の礎石を除いた12個の礎石には、取り替えや移動など位置変更の痕跡は全く見られなかった。この事は元和6（1620）年に建てられたと伝える西櫓が、三百有余年を経た今日まで柱位置を変ず、創建当初に据付けられた礎石が一貫して用いられてきた事を示している。

しかし、今回の発掘調査によって新たに建物内に存在した入側柱礎石板抜穴4ヶ所を検出した意義は大きい。西櫓に入側柱があったとは調査関係者の誰も想えていなかつたからである。

神戸信俊氏の聞き取り調査によれば、昭和25年頃に行われた西櫓解体工事の時には柱としては外側柱しかなく、建物内には一本の柱も無かったという。この時点では西櫓は外側柱のみで入側柱を欠く構造であったことは確実である。また、明治以後、西櫓は改変を受けていない。とすれば、かつて存在していた4本の入側柱を礎石ごと撤去し、外側柱のみで入側柱を欠く構造に西櫓が改築されたのは江戸時代という事になる。

この改築工事は相当大規模なものであったと考えられるが、西櫓の改築に関する記録としては唯一、文化7（1810）年に修理例の出されていた西櫓を嘉永5（1851）年に修理した記事が残されている。^{註1}詳しい修理内容は記されず、まして入側柱に関しては全く記録が残されていないため断定はできないが、入側柱の撤去を伴なう改築工事はこの時に行なわれたと考える。

次に問題となるのは入側柱礎石設置の時期である。掘形内や礎石抜取穴から遺物が全く検出されなかつたため、具体的な年代は不明であるが、可能性としては二つの場合が考えられる。一つは西櫓創建時から存在したとする考え方であり、他は西櫓創建時には存在せず、後に加設されたとする考え方である。前者の場合、改築は最低1回で済むのに対し、後者の場合には加設と撤去を含めて最低2回の改築が必要となる。

江戸時代を通じて西櫓の修理関係記録はきわめてすくなく、また、掘形地業の規模、工法上、外側柱と入側柱の間に差はみられず、外側柱礎石と同様に入側柱礎石も創建時に設置されたものと考えたい。

2 東櫓

東櫓では礎石の遺存状況が悪く、西櫓のように創建以後の改変の痕跡は明瞭にしがたい。しかし、比較的遺存状況の良い入側柱北列の礎石では位置変更の痕跡は見られず、他の掘形にも

改変はない。文献記録上も西櫓には修理記録があるのに対し、東櫓には元和 6（1620）年の創建以後、修理記録は見当らない。東櫓に関しては創建以後、炎上倒壊する明治 17 年まで、礎石位置に変化がなかったと推測される。

今回の発掘調査では、礎石据付に際して丸太地業とも呼ぶべき特異な工法が用いられた事が判明した。

土浦城の築かれた地は低平で、江戸時代には度々水害に見舞われている。地勢は水分を多く含み、地盤は軟弱である。そのため、礎石建、瓦葺のような重構造の建物を建てる際には礎石の沈下を防ぐに足る基礎地業が必要である。東櫓に見られる礎石下の強固な版築や丸太事業もこれに応ずる為の地業であろう。

礎石下の丸太事業は土浦藩藩校郁文館の正門でも発掘調査で検出されており、追手門でも存在したと言わされている。^{註3} 郁文館が現在の地に移築されたのは天保 10（1839）年であり、東櫓が作られてから 219 年後である。郁文館はもともと土浦城内二の丸に建てられていたものであり、^{註2} 移築前の郁文館にも丸太事業が施されていた可能性もある。

ただ同じく丸太事業と言っても東櫓と郁文館では構造に差があり、東櫓では堅杭と水平に並べた丸太で構成されているのに対し、郁文館では堅杭のみで水平に並べた丸太は検出されていない。両者の構造の差は上屋構造の差によるものであろう。

また、同じ江戸時代に低湿地で行なわれた礎石建物の地下事業の一つに後事業がある。これは礎石の下だけでなく、建物の平面全体に相当する範囲全体を掘り下げ、木材で頑丈な後を組んだ上にロウソク石と呼ばれる柱石を立て、この上に礎石を置くものである。^{註4} きわめて火がかりな工法で、地下に埋めた木材が常に水分に恵まれて腐らず、かつ、版築も行なえない軟弱な地盤で行なわれる。

このように、規模、構造に差のある丸太事業と後事業であるが、両者に共通する特性がある。それは木材の腐朽を防がねばならない事で、そのためには水分の充分な補給と空気の遮断が必要不可欠となる。しかし、東櫓の場合、丸太事業の施された位置は海拔 4.5m で地下水位よりも高い位置にある。このような場所では早晩、木材は腐朽してしまう。事実、堅杭も丸太材もすべて腐朽し、空洞化していた。それにも拘らず礎石が沈下もせず 250 年以上も建物が残ったのは丸太事業の上に施された版築がきわめて堅固であったからであろう。

3 土壘

現在の土浦城の基礎を作り、整備したのは松平信一・信吉父子と言われ、信吉が土浦城を去った元和 3（1617）年の三年後には本丸土壘上に東西の両櫓が築かれた。この頃の土壘の規模、構造等は不明であるが、明暦 2（1656）年には本丸土壘の屋根が瓦葺に改められている。以後、明治に至るまで本丸土壘上に瓦葺の櫓が巡らされていた事は土浦城の古絵図や写真の示すとこ

ろである。

今回の調査では3ヶ所のトレンチのうち2ヶ所のトレンチで土塁の積土を検出した。いずれも黒褐色ないし褐色土を以て造成していることは、西櫓や東櫓の土塙構築土と共通している。しかし、櫓門の東西両脇で確認されている土塙構築土⁵とは土質を異にしており、今後に課題を残すものとなった。

一方、第3トレンチで検出した土塁上面の石敷遺構は塀の基礎地業と考えている。この石敷遺構を直線的に延長すると東櫓東外側柱南端礎石位置とほぼ一致すること、○所蔵土浦城古絵図(図版2)では東面築地の北端が東櫓の東端に取り付いていることがその理由であり、土塁現上端地表面にここで想定した塀の基底部の線に沿って砂利が一列をなして走っていることも傍証としてあげられよう。石敷遺構の最大幅は70cmで、約2尺1寸に相当する。また、第2トレンチから出土した扉板瓦(第15図15)が本丸上扉に用いられていたものと考えてよければ、扉板瓦の下面に残る軒止め突起の寸法から、土塁上端幅は50cmを超えないことは確実である。

第3トレンチ本丸側の現地表面下約1.5mで検出した土浦城築城当時の旧地表面直上から出土した縄文土器も検討の余地を残している。

発掘面積がきわめて少なかったため、わずかに1片のみで、他に遺物は全くない。縄文時代後期後半の加曾利B式に属すが、土浦市内の縄文時代遺跡は全て丘陵地域にあり、土浦城周辺に広がる桜川流域の低地では全く発見されていない。今回発掘した場所が縄文時代の遺跡であった可能性もないわけではなく、この場合には縄文土器を含む厚さ約60cmの土層は縄文時代以後の自然堆積層ということになる。土浦城周辺の縄文時代遺跡立地の面から、この土層を土浦城築城時の盛土層と考えるが、この問題の解決には土浦城内の発掘調査のさらなる進展が必要となろう。

註

- 1 土浦市教育委員会『土浦市史』 1975年3月
- 2 土浦市教育委員会『茨城県指定文化財土浦城址内櫓門保存修理工事報告書』 1988年3月。
- 3 註1と同じ。
- 4 昇覚寺鐘楼保存修理委員会『昇覚寺鐘楼修理保存・発掘調査報告』 1985年3月。
- 5 註2と同じ。

第2節 遺 物

1 瓦

近年、とみに近世の考古学的な調査、特に各地の近世城郭や都市の調査事例が増えてきた。こうした調査にともない多量の瓦が出土するようになり、報告がなされている。筆者も近世都市江戸における考古学的調査、特に東京大学本郷内遺跡の加賀藩本郷屋敷より検出された軒平・軒棟瓦の瓦当文様の研究によって、その変遷を明らかにしたことがある。

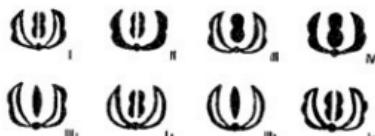
土浦城址では、考古学的調査による資料は少ないが、櫓門の解体修理にともなって瓦が多数検出されている^{註2}。これらのうちには、軒平・軒棟瓦の瓦当文様に江戸を中心としてみられる文様構成が混在しており、これらの資料を江戸の資料と比較検討してみたい。

江戸を中心としてみられる軒平・軒棟瓦の文様は、中心飾りと唐草上下2反転と子葉の7単位で構成され、中心飾りは8の字状の中心飾りと内湾する脇、中央下の点珠の4単位で構成される(第24図1)。この文様構成をもつ資料を「江戸式」と仮称する。「江戸式」は、中心飾り、

唐草、子葉の各部の文様で細分することができ、これらの文様各部の組み合わせによって変遷を追うことができる。

中心飾りには、中央に分割線あるいは沈線のある資料と脇が重線と単線の資料がみられ、それらの組み合わせにより4大別できる。しかし、中心飾りの型式差は時間的な序列として捉えることができない(第21図)。一方、唐草と子葉の変化には時間的な序列をみるとができる。唐草には、A~E類の重線からF~H類の単線への変化、及びI→J→K→L類のような唐草先端の肥大化がみられる(第22図)。子葉には、g類のような内側のくびれがみられるようになると、g→h・i→j類のような長大化の傾向がみられる(第23図)。

「江戸式」は5期に区分されている。1期は、本瓦葺のみの時期であり、元禄年間(1688~1703)前後にみられる。「江戸式」の



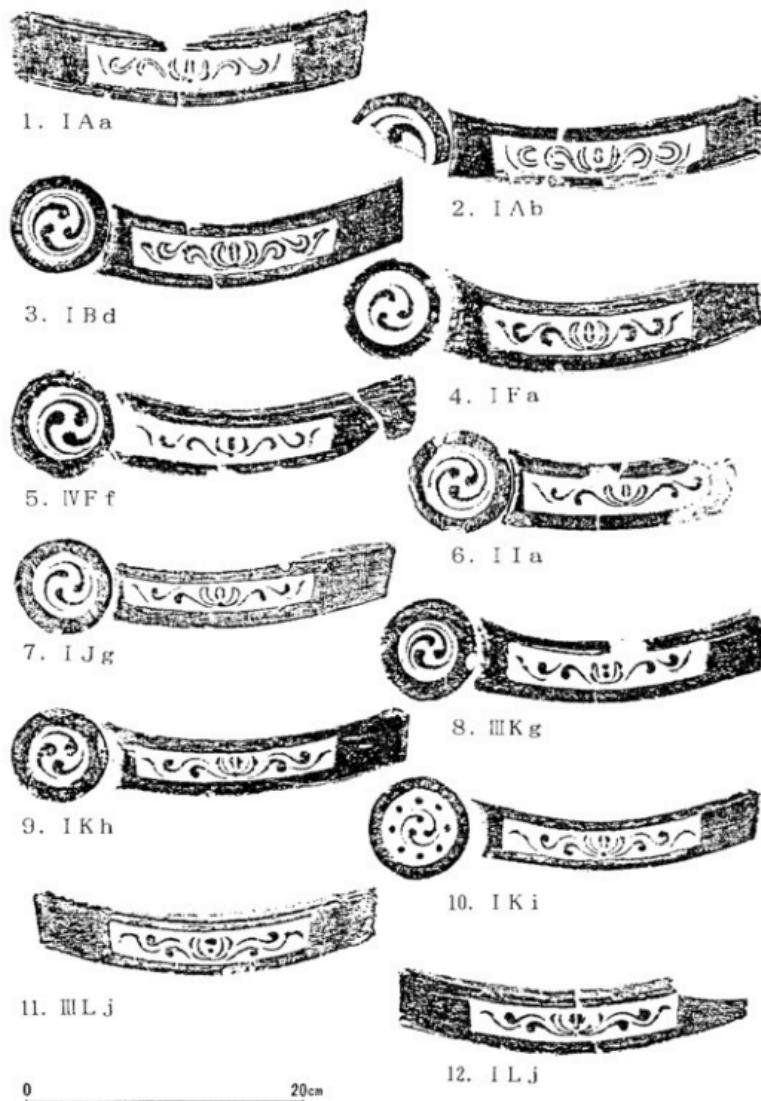
第21図 中心飾り分類模式図 註1より



第22図 唐草分類模式図 註1より



第23図 子葉分類模式図 註1より



第24図 「江戸式」瓦当文様拓影（東京大学本郷構内御殿下記念館地点出土） 註1より一部收

基本的な組み合わせは、IA a 類（第24図1）であり、同じ文様をもつ資料が江戸各地の遺跡から多数出土している。^{註4} 2期は、桟瓦葺の資料が出現する時期で、18世紀第2四半期から第3四半期にかけての資料であり、第24図2～7があたる。唐草は重線から単線へと変化し、唐草先端の肥大化がみられるようになる。3期は18世紀第4四半期の資料であり、第24図8がこれにあたる。唐草はK類のように先端が肥大化し、円盤状になる。4期は19世紀第1四半期の資料であり、第24図9・10がこれにあたる。h・i類のように子葉の長大化がみられる。5期は19世紀第2四半期以降の資料であり、第24図11・12がこれにあたる。唐草はLのように山がなくなり、子葉の長大化傾向が進み、唐草と同等の大きさのj類にあたる。

土浦城址出土資料には、6種類の「江戸式」が確認できる。IVF1類（第25図3）、IKh類（第25図4）、IIIKj類（第25図5）、ILi類（第25図6）ILj類（第25図—7・8）、IILj類（第25図—9・10）がそれで、文様の中心は、Lj類であり、「江戸式」の5期にあたり、幕末から明治期の文様である。3・4・6は4期にあたる。

「江戸式」と類似した資料として、第25図11～13がある。11は中心飾りの脇外側が外反し、唐草は単線で、細いG類、子葉はb類を長めにしている。12は中心飾りの脇内側にもくびれがある。唐草先端の丸みは小さく、J類にあたる。中心飾りに近い第一唐草は中心飾りの点珠まで伸びず、脇と接している。子葉は横に寝そべり、第二唐草と接している。13は中心飾りはI類にあたるが、唐草の巻き込みがなく、先端近くで幅広くなるのみである。子葉はi類にあたる。

このほかに、土浦城址独自の文様として、中心飾りと上下2反転の唐草で構成される第25図1・2がある。いずれも細い線で表現され、唐草は重線になり、巻き込みは少ない。

以上のように土浦城址の軒平・軒桟瓦には、大きく3大別ができる。第1は「江戸式」の資料、第2は「江戸式」類似文様の資料、第3は土浦城址独自の文様の資料である。

このような3種の文様が混在する背景として、江戸近郊からの瓦の搬入が考えられる。このことは胎土の相違からも窺うことができる。江戸近郊の瓦の胎土には雲母がほとんど含まれず、輝石系の重鉱物組成をしていることが、千代田区紀尾井町遺跡の調査で明らかになっている。^{註5} これにたいして、土浦付近の瓦の胎土には、多量の雲母が混入されている。土浦城址の瓦では、「江戸式」の第25図3～5・7に雲母が含まれず、「江戸式」の第25図6・8～10と「江戸式」類似文様と土浦城址独自の文様をもつ瓦には、多量の雲母が含まれている。

土浦城の軒平・軒桟瓦には、まず、中心飾りが3葉の独自の文様が中心に使用され、19世纪以降、特に幕末明治期にかけて、江戸近郊から瓦の搬入がみられるようになり、それにともない「江戸式」あるいは、「江戸式」を模倣した瓦当文様が在地で造られるようになったと考えられる。このことは、今回の発掘調査でえられた軒平瓦の資料5点のうち4点までが土浦城址独自の文様であったことからも考えられる。



0 20cm

第25図 土浦城址瓦当文様拓影（櫓門解体修理時） 計2より

以上、「江戸式」と土浦城址の軒平・軒棟瓦との対比を試みた。江戸近郊からの瓦の搬入については考古学的な資料のみに基づくものであり、文献資料の調査を今回できなかった。このことは、土浦在地の瓦屋についての文献調査についても同様である。また、大部分が遺存建築物の資料であるため、年代を決定することが困難であり、今後発掘調査による資料の増加とともにによりはっきりした年代観が得られると考える。

註

- 1 加藤亮「江戸時代における『江戸式』の展開一軒平瓦・軒棟瓦の瓦当文様の変遷」『史学研究集録』第14号 國學院大學日本史学専攻大学院会 1989年3月。

なお、東京大学本郷構内遺跡については寺島孝一「東京大学本郷構内遺跡」(『日本考古学年報』38 日本考古学協会 1987年3月)を参照されたい。
- 2 石川功・他「茨城県指定文化財土浦城址内櫓門保存修理報告書」 土浦市教育委員会 1988年3月。
- 3 該当資料が検出されている江戸遺跡の報告には以下がある。
 - a 大谷猛・佐々木達夫・他『文京区動坂遺跡』 動坂貝塚調査会 1978年3月。
 - b 笠野毅・佐藤利秀「江戸城三の丸の出土品」『書院部紀要』38 宮内庁書院部 1986年3月。
 - c 加藤晋平「浅草寺私奉」『物質文化』18号 1971年6月。
 - d 加藤晋平・小林克・他『真砂遺跡』 真砂遺跡調査会 1987年12月。
 - e 加藤晋平・他『江戸 都立一橋高校地点発掘調査報告』 都立一橋高校内遺跡調査団 1985年8月。
 - f 後藤宏樹・上敷領久・他『千代田区紀尾井町遺跡』 紀尾井町遺跡調査会 1988年11月。
 - g 清水潤三・高山優・他『旧浜離宮庭園一浜松町駅高架式歩行者道路仮設工事に伴う発掘調査報告』 旧芝離宮庭園調査団 1988年3月。
 - h 鈴木公雄・桜井隼也・他『麻布台一丁目郵政省板倉分館構内遺跡』 港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986年3月。
 - i 鈴木公雄・余良貴史・他『芝公園一丁目増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』 芝公園一丁目遺跡調査団 1988年3月。
 - j 滝口宏・富樫雅彦・他『自證院遺跡』 新宿区教育委員会 1987年3月。
 - k 滝口宏・富樫雅彦・他『三栄町遺跡』 新宿区教育委員会 1988年3月。
 - l 富樫雅彦・後藤宏樹・他『平河町遺跡』 千代田区教育委員会 1986年9月。
- 4 註3文献中、b～iの各遺跡の結果にみられる。
- 5 註3文献fで、重鉛物分析の結果、「江戸式」の瓦当文様をもつ資料では輝石系重鉛物の占める割合が圧倒的に多く、雲母系重鉛物は若干量含まれる程度であることが報告されている。

第VII章 西櫓の復元

1 はじめに

本章では西櫓・東櫓の復元に先立つて行なわれた今回の発掘調査の結果について特に建築学の視点から考察を行なう。また、他章の内容と重複する部分もあるが建築学としての解釈であり容赦願いたい。

復元に当たり文献、古絵図、写真等の調査による資料はおおよそ出尽くした感がある。また1954年に行なわれた西櫓解体工事の工事関係者や西櫓を見聞している古老等からの聴取もほぼ山場を超えた。その結果西櫓については、ほぼ復元可能な資料が採取され、東櫓についても資料的には西櫓との比較により、復元可能な状況が生まれつつある。しかし、この文献等の調査を通して何点かの確認事項や復元建造物の構法、意匠等の推定部分に関する仮説検証の必要性が生じた。それを解決する手段のひとつとして、東西櫓跡の残存礎石部分の考古学的発掘調査による実証的資料の採取方法がある。その結果、確認・検証が期待出来る部分がある。また未知の資料の採取も期待出来る。さらに、1985年本丸の一部分を発掘調査した西ヶ谷恭弘氏の中間報告や新聞発表の中に、東西櫓に関して述べている部分がある。今回の発掘調査資料と西ヶ谷氏の報告とを突き合わせる事が出来ればその結果として、内容の確認ならびに比較が出来るであろう。

文献調査や聴取調査等の結果を掲載する事は、必要かつ有意義なことではあるが、本報告書では紙面数に限界があり、他の報告書に機会を譲ることにする。

2 確認 検証事項

以下確認および検証事項を示す。

- 礎石の配置・配列・形状・計測等
- 礎石の移動・取り替え等の有無
- 現状礎石以外の礎石または礎石痕跡の有無および配置・配列・形状
- 東櫓位置焦土面の有無
- その他

3 調査結果

1) 級石の配置・配列・形状・計測等（詳細は第IV章第1節を参照）

礎石の配置

配置場所は旧土浦城本丸土塁上西口に位置する（第26図）。

礎石の配列・形状

配列は扁平な円みのある自然石と、のみ加工された布石とが交互に規則性を持って帯状に配列されており、全体としては長方形をなしている(第2図)。つまり、四隅と1間間隔に円みのある自然石が（または置かれていたが抜き取られた跡がある）置かれ、その間を布石がないでいる。石の数量は円い自然石14個(抜き取られたもの2個)、布石29本である。長方形の平面的な規模は、円みのある自然石の芯芯で長手方向は約4間、短手方向約3間である。礎石全体の向きは長手方向を基準にした場合、南北軸に沿って約23度東側に傾いている。

計測

個々の石質や大きさ、天端の凹凸、配列の詳細な寸法は第IV章第1節に示す。

円みのある自然石はそれぞれ円形、橢円形、方形等に近いもので構成されている。寸法は縦66cm～52cm、横57cm～43cm、高さ（地上露出部分）11cm～4cmの範囲である。布石は外周側面と上部平面とを平らにのみ加工したもので、両加工面が矩になっている。寸法は縦105cm～30cm、横25cm～19cm、高さ（地上露出部分）15cm～10cmである。

礎石地上露出部分の痕跡

礎石の地上露出部分には風化して瘦せている部分と、殆ど風化していない部分がある。これは自然石にみられ、本報告書では、あたり痕跡と呼んでいる。図4に示す様に自然石上部面には巾約18cmで帯状または長方形で配列方向に風化していない部分がある。布石にはあたり痕跡はない。自然石いー2番といー3番にみられる帯状または長方形のあたり痕跡の外側約90%の部分に直線状のあたり痕跡が有る。この痕跡の延長線と布石の外角部が直線で一致する。

2) 矿石の移動、取り替え等の有無

礎石の移動は、自然石遊一1番と遊一2番については、近年、人為的に移動されている。その他の礎石には移動は認められないという。したがって取り替えも認められないと思われる。詳細は第IV章を参考。

3) 現状礎石以外の礎石または礎石痕跡の有無および配置・配列・形状

西櫓の礎石は一般に現状の礎石が原形のものと思われていた。しかし、4間×3間規模の一階平面をもつ二層の各地の櫓の遺構と比較すると、必ずしも現状が原形と思われない部分がある。たとえば同規模の松山城二重櫓、大州城三の丸南隅櫓は、側柱以外に1～2本の中柱を有している。土浦西櫓も柱の有無のいかんを問わず、確認の必要があった。この確認により上部構造、とくに梁組に違いが出てくる。結果として、第3・4図に示すように計4ヶ所に礎石下の地業跡と思われるものが発見された。

地業部分の構造については第IV章第1節を参証。

4) 東櫓焦土面の有無

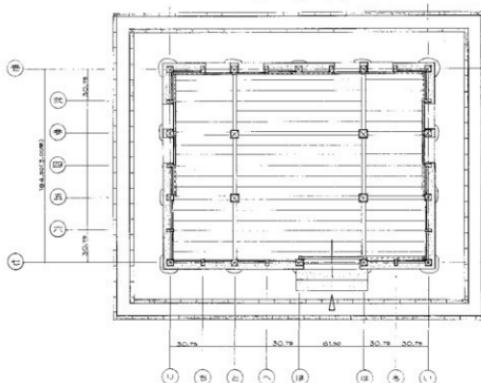
今回の発掘に際して東櫓焦土面の確認を行おうとしたのは、明治17年焼失した、本丸館とそ



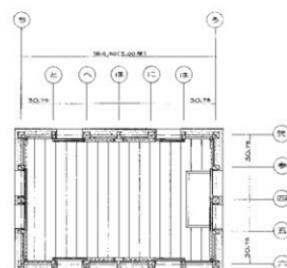
正面図



側面図

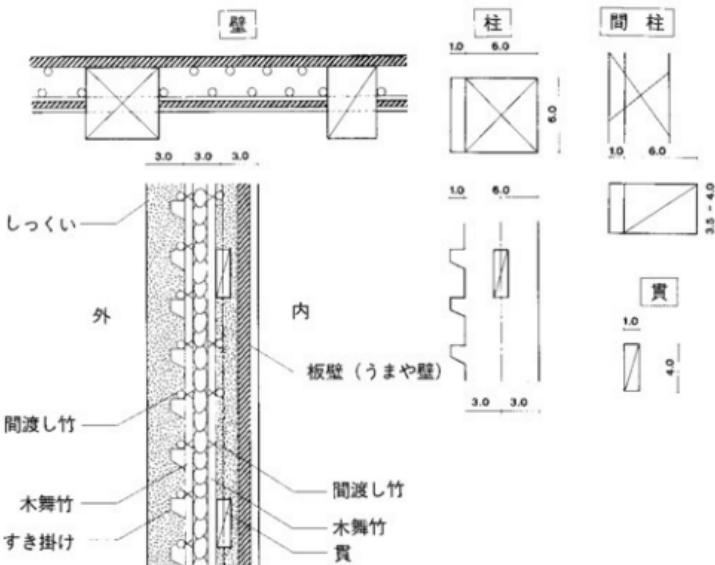


一階平面図



二階平面図

第26図 西橋復元図



の際類焼し失われたと言われる東櫓について建築学的な考察を試みようとしたからである。発掘の結果、焦土面は出なかったようである。

4 考察

以上得られた結果を建築学的視点で考察を試みる。

礎石の配置・配列・形状・計測の結果より以下のことが確認された。

西櫓は旧土浦城本丸土塁上西北に位置する3間×4間で長方形の最下階の平面を持つ建造物である。方位は南北軸にそって、長手方向を基準にして、約23度東側に傾いている。円い自然石が1間間隔に置かれていて、その間を布石でつないでいる。これは自然石と同じ位置上部に、柱乃至束が存在していたことを示すが、この場合は柱であるといえよう。したがって柱間を基準とした平面寸法は、柱芯芯で1間当り6尺1寸5分であり、長手方向短手方向とも同寸法である。

礎石の移動や取り替えが、人為的に移動された少数の石を除いて、近年まで無かったということから次の事が確認された。古文書に書かれている、元和6(1620)年創建以来、最下階平面において、同規模・同構造の建造物が、昭和29年?(25年との説もある)解体まで存在していたことになる。さらにつきつめると創建時の建造物が、解体時まで残っていたと考えられる。建て替え等が有ったとすれば、おこりうると考えられる不同沈下に対して礎石の不陸直し

や取り替えが行なわれる。しかし、創建時の建造物がそのままであったとは考えられない。屋根の葺き替え、壁の塗り替え、腐朽部分の木材の取り替え等々平均して、20乃至30年間隔で修理、模様替え等が行なわれていたことが推測される。

今回発見されたあたり痕跡は上部構造を確定するにあたり、決定的な事実を提供してくれた。柱が直接礎石の上に乗っている石場建構造ではなく、土台の上に建つ、土台敷構造であること、土台隅角部が十文字形に交叉した把手であること、土台幅が約6.0寸（180mm）であることがある。このことから、柱の断面寸法が推定される。つまり土台幅より大きいとは考えられず、したがって正角の場合は6.0寸角乃至それよりやや小さめの断面寸法と推定される。また、土台のあたり痕跡の外側約90mmの直線の痕跡の延長が布石の外側の直線と一致することは、塗り込め壁の厚さが、土台外側から3.0寸であったことを示し、布石の外側で納められていることを示している。壁厚は合計で7.0乃至8.0寸であり、解体時の証言から、柱にすさ掛けが有ったということと壁厚とを考えると、二重木舞の壁であったと考えられる。

礎石内側に4ヶ所の地業面が発見されたことから次のことが考えられる。地業面上部に礎石がおかれていた。この場合東石ということも考えられるが、東の場合、一般に礎石に比較して地業が簡単な方法が取られることが普通である。今回発見された地業跡は既存礎石の地業と同様に施工されており、施工順序も同工程であると推定される。したがって東石の場合、地業は東石掘え付時に行なわれることが多く、簡易な施工になることを考え合わせると、東とは考えられず、柱と考えるのが妥当である。それでは柱がいつの時期に抜き取られたのかという疑問が出て来るが、現状では時期を確定するにはさらなる資料の解析が必要となろう。またもう一つの疑問として、創建当時から柱が無かったのではないかということである。これは平面の大きさ、柱の位置、柱の太さから、4本の柱が有った場合、生活的に使用しにくいことが予測される。その場合、建て方直前に柱を入れなかったことも考えられる。柱を入れなくとも十分構造的には余裕が有る柱・梁組である。可能性としては小さいことと思われるが、現状では考え方として残しておきたい。いずれにしても、建物の計画段階では柱が有ったと推定されよう。以上のことから、基礎、土台、壁、柱について復元してみると第26・27図に示すようになる。

次に東櫓の焦土面について述べてみたい。土浦史誌によると東櫓は明治17年本丸館と共に焼失したとされている。今回の発掘で焦土面は確認できなかった。そこで当時の本丸及び本丸土壘にあった建物の種類、構造、位置、関係を考えてみる。東櫓側にあった建物は現存する霞門、東櫓、鐘楼、太鼓櫓、腰掛などである。構造は、東櫓が土壁しつくいの塗り込めである以外は、いずれも木造顯しいである。霞門をのぞいては、本丸館からの距離は、方向は別として同じようなものと考えられる。

以上のことを考慮してその後に写されたと思われる写真を見ると、確かに東櫓が無くなっている。

いる。塗り込めで一番燃えにくいはずの建物である。焼失であろうか。取り壊わしであろうか。

次に、今回の発掘調査結果と、1985年調査した西ヶ谷恭弘氏の発表、報告とを比較検討してみる。資料は西ヶ谷氏の昭和60年12月6日付報告「土浦城遺構調査、二の丸発掘調査中間報告」である。

その9ページから10ページにかけて〈東櫓と西櫓の構成〉部分を比較検討してみる。

まず、東櫓についてである。西ヶ谷氏は、北側二列の礎石は「ズレをみていない」とし、それを規準にして、柱間を「柱真芯で190cmおよび200cmを測る」「6尺5寸あたり」と算出している。また「礎石は柱にすべて控えられている」とし、いわゆる石場建構造としている。最下階の平面は「四間四間」としている。今回の発掘と公園監理作業員からの聴取とにより礎石はたびたび置き替えられていることがわかり、したがって、表出礎石からの柱間測定は不可能に近く、根拠にとぼしい。発掘した地盤面の測定から推測すると、柱間は後記する西櫓と同じか、それに近い数値と思われる。柱は、礎石上に残る痕跡から、土台敷きであることが判明し、その巾は約8.0寸位である。石場建ではない。平面は基礎地盤面からは「4間×5間」である。「四間四間」ではない。

西櫓について、西ヶ谷氏は「柱間は真芯で180～181cmに統一されている6尺間である」としている。西櫓は程完全に礎石が残っており、柱間を測定すると柱芯芯「6尺1寸5分、約186cm 35」になる。根本は約6.0寸巾の土台敷である。その他西ヶ谷氏は建築年代についても言及しているが、事実誤認を含んだ資料分析の結果であり、大きな意味は無いと思われる。

また昭和61年1月24日、いはらき新聞記事中の東櫓「御三階櫓」説については、現在あるあらゆる資料分析を行なってもその事実はない。「論外」である。

以上考察を行ってきたが、今回の調査で判明した事は貴重な事実を多数含んでいる。しかし、まだまだ不明な事も多く、今後の調査により期待がもたれよう。

第VIII章 付 編

1 二の丸土壘の調査

今回の発掘調査期間中、亀城公園管理棟の改築工事に伴ない、本丸の北面から西側にかけて遺存する二の丸跡の上壘が部分的な削平を受けていたため、急遽、その断面調査を行なった。ただし、本地区は当初の調査対象区域外であり、調査範囲は削平部のみにとどめた。

削平を受けたのは北西隅部の二の丸内側の約二分の一で、土壘を切断するまでには至っていなかったため、外周側の形状等については確認していない。

調査の結果、当地点での土層堆積層序は以下のとおりである。

第1層 暗褐色土層（粘性・しまりともに欠ける）

第2層 やや明るい暗褐色土層（やや粘性をもつがしまりに欠ける。）

第3層 暗褐色土層（やや粘性をもち、しまる）

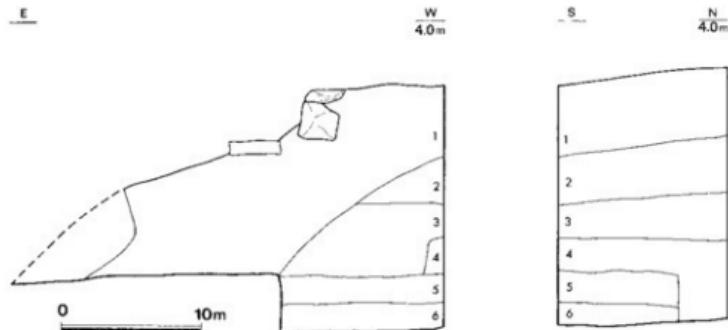
第4層 暗褐色土層（粘性に富み、しまる）

第5層 暗褐色土層（粘性に富み、ややしまる）

第6層 白色粘土層（粘性、しまりに富む）

このうち、第4層以上が土壘の盛土、第5層以下が旧地表面及び自然堆積層と考えられ、第5層上面の高さは海拔2.19mである。現状の土壘上面高は海拔3.54mであり、旧地表面との比高差は1.35mとなる。なお、現在、土壘上端部に切石が並べられているが、配列も部分的に見られるだけであり、築城当初のものではなく、明治以後に設置された可能性が高い。

本地区から遺物は全く検出されず、調査の性格上、土壘の下端幅も確認できなかった。



第28図 二の丸土壘土層図

2 土浦城櫓門の発掘調査

櫓門の発掘調査は、今回の調査に先立つ昭和62年5月8日～6月19日、同63年1月20日～27日の2回に分けて行なわれた。

調査の契機は、土浦城址整備事業に伴ない、以前より老朽化の進んでいた土浦城櫓門の解体修理を実施したところ、基礎の不陸が予想以上に大きかったため、地下地業をPC杭打ち及びコンクリート地中梁に変更することになったためである。そのため、調査区は基礎の根切り部分のみという変則的なものであったが、この時の調査によって、櫓門の基礎地業についていくつかの点を明らかにすることができた。

まず、櫓門の基礎の構築については、はじめに櫓門下に大きな掘り込みが造られ、その上に盛土を五層に盛り上げて基盤とし、次にその盛土を摺鉢状に掘りぬいて中に円錐形の礎石を設置し、空間に円礫を充填したものである。この盛土は厚さ約1.5mの版築状をなすもので、非常に固く叩きしめられており、この土層が櫓門の柱の支持層となっている。これは櫓門下の地盤が比較的の良質であったためと思われ、そのため通常低湿地で見られる浅地業等の入念な工法は行なわれていないことが確認された。また、この版築盛土の下層より多量の土師質土器（かわらけ）が破碎された状態で出土したが、これは櫓門の地鎮祭祀に併なうものと思われ、個体中には墨書きあるものも存在している。

次に、この前述の礎石の上に、もう一つ礎石が重ねられて、二重になっていたことが確認された。

この礎石は、下（旧）柱礎が安山岩製であったのに対し、上（新）柱礎は花崗岩製で、新柱礎はその形状より、あらかじめ旧柱礎の上に設置することを予定して製作されたものと考えられる。また、これら新旧両柱礎の遺構面には、櫓門に併なう雨落ち溝（新柱礎）や土止め石垣（旧柱礎）等各種の遺構の存在も確認され、櫓門の付属施設についても一部ではあるが明らかにすることができた。なお、この二重礎石の設置された理由であるが、旧柱礎に起きた不陸を補正するためと、櫓門全体のかさ上げが目的であったと推察される。

しかし残念なことに、この時の調査においては、解体した櫓門の部材からも、地下遺構や出土遺物からも、櫓門の創建年代を示す墨書きや刻印等の資料は検出されず、そのため年代を確定することはできなかった。また新柱礎の設置された年代についても、当初近・現代にまで降るものとも考えられたが、不明な点もありこれを確定することはできなかった。

以上のように、創建年代等については明らかにすることができなかつたが、同時期に行なわれた都文館の調査とともに、近世の建造物の地下遺構の一端を明らかにすることのできた意義は大きく、今回の東・西櫓の調査の引き金となったものである。

3 郁文館正門の地下地業について

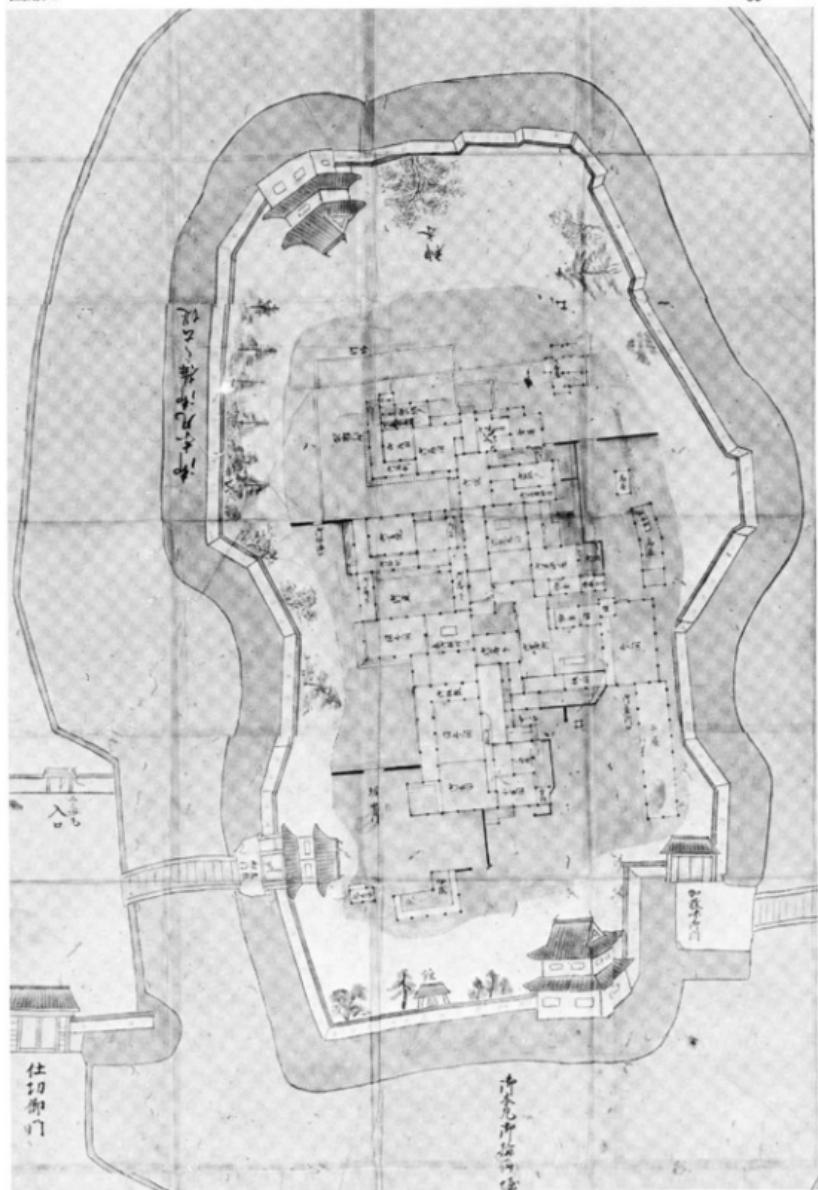
郁文館は、江戸時代の土浦藩藩校であり、天保10（1839）年の創建で、文館と武館が併設されていた。土浦城の西南に隣接し、現在は長屋門形式の正門だけが残されており、昭和46年土浦市指定文化財（建造物第1号）となっている。昭和62年、建物の老朽化に伴い解体修理が実施され、それに先立ち地下遺構の発掘調査が行なわれた。調査期間は、昭和62年5月9日～6月2日の25日間である。以下、地下地業を中心にいくつかの調査所見について、その概略を述べることにする。

基礎石について

建物の基礎石は、解体後地下10cm～20cmからほぼ完全な形で検出されている。布石と独立の基礎石が併用されており、門の正面には布石の基礎石を、それ以外は柱ごとに独立の基礎石が使用されている。基礎石に残された当たりの痕跡より、建物には上台がめぐらされていたことが判明した。石材は、布石には伊豆石が、独立礎石には通称筑波石と呼ばれる雲母片岩が用いられている。

地下地業について

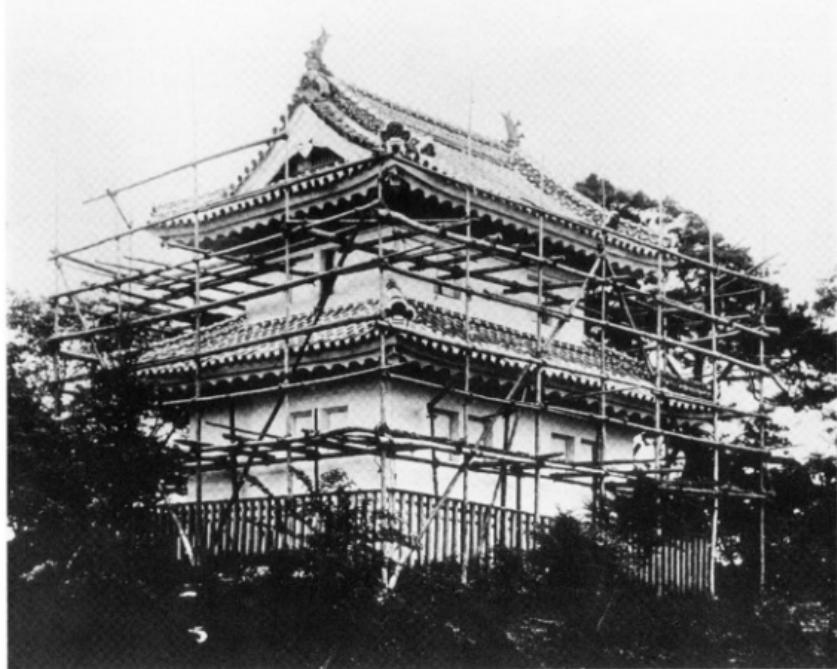
土浦城及びそれに伴なう城下町は、桜川氾濫原の低湿地帯に形成されており、多くの建造物にはなにかしかの地下地業がなされていたものと考えられ、郁文館の正門についても例外ではない。この正門は、それが建物の建築に際してのものか、あるいは城下町の整備に際してのものかは定かではないが、整地土としての埋め土の上に建てられている。そして、地業はこの埋め土を掘りこむかたちで行なわれている。掘り込みは、基本的には個々の柱ごとになされているが、中には、2本一組みあるいは東棟正面の布石下のように柱通りを一括して掘りこんでいるところもある。この掘り込みは、埋め土の最下層すなわち自然層であるシルト層との接点にまで達し、その深さは約80cmを測る。地業は、この掘りこみ内に、太さ15cm前後の2本ないし3本の松杭をその底面まで打ち込み、その後、砂や砂利混じりの土を版築状に充填させる掘りこみ松杭地業とでも呼ぶべきものである。基礎石は、この地業の直上に置かれるが、手のこんだ地業の割には、基礎石の沈下が著しい。これは、もともとの地盤の軟弱さとさらには埋め土の軟弱さに起因するものと思われる。



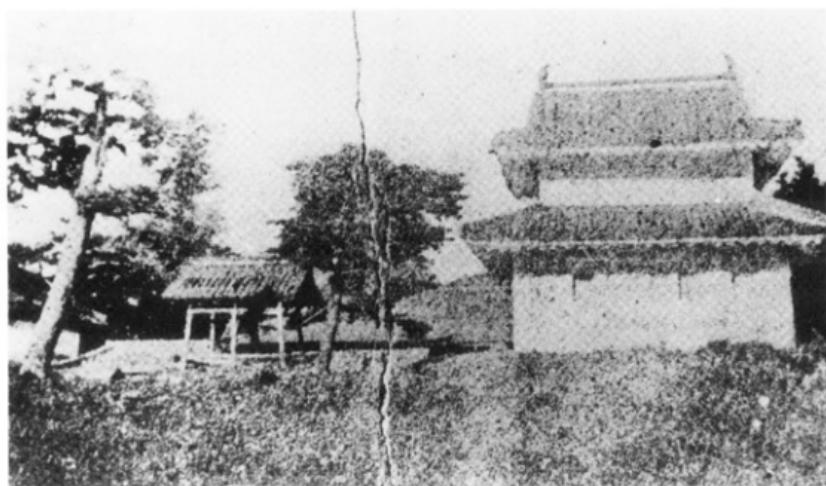
土浦城本丸古絵図(1)



土浦城本丸古絵図(2)



1 西棟全景



2 東棟・鐘楼遠景

(外堀から)



1 西櫓遠景

(本丸から)



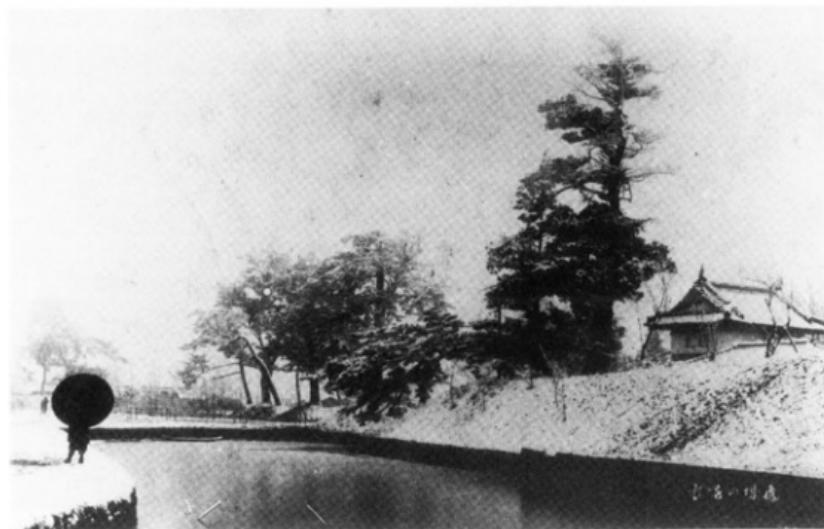
2 西櫓遠景

(外堀から)



1 西櫓と土壘

(外堀から)



2 西櫓と土壘

(外堀から)



1 西櫓現状全景

南から



2 西櫓現状全景

北から



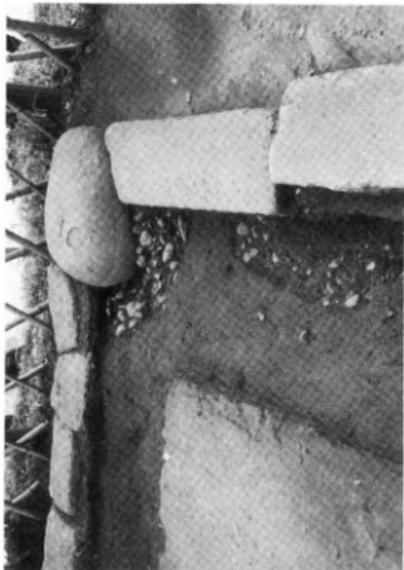
1 西檜発掘遺構東半部

南から

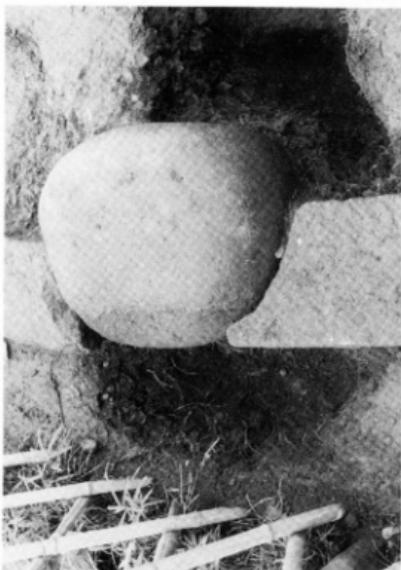


2 西檜発掘遺構西半部

南から



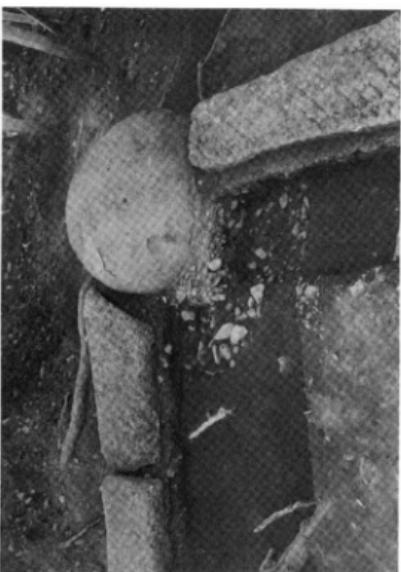
1 壱一い礎石地業



2 壱一は礎石地業



3 壱一と礎石地業



4 壱一り礎石地業



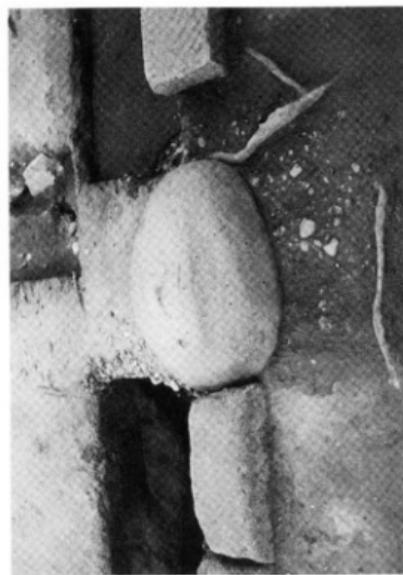
1 參一い礎石地業



2 七一い礎石地業



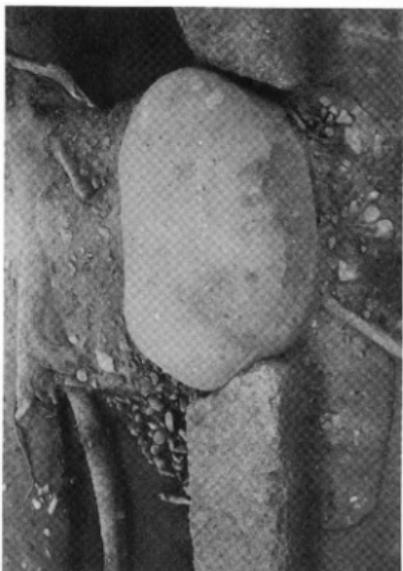
3 七一は礎石地業



4 七一ほ礎石地業



五一い礎石地業



2 参一り礎石地業



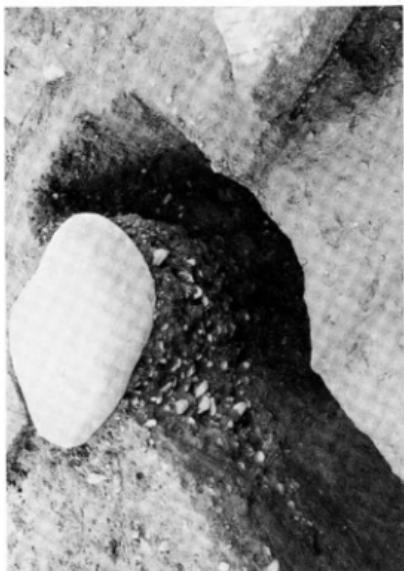
3 土壌断割部全景

東から



4 土壌断割部全景

西から



1 七一は礎石地業断面



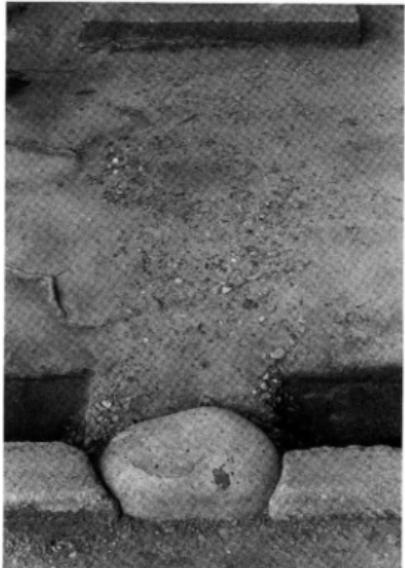
2 五一は礎石抜取穴と地業断面



3 壱一は礎石地業断面



4 参一は礎石抜取穴と地業断面



1 参一と・五一と礎石抜取穴と地業



2 五一と礎石抜取穴



3 参一と・五一と礎石抜取穴と地業

(東から)



東棟現状全景

(南から)



東棟北端東西礎石列

(東から)



1 東檣発堀区全景

(南から)



2 東檣発堀区全景

(南から)



1 東檣南北断割部

(北から)



2 東檣東西断割部

(東から)



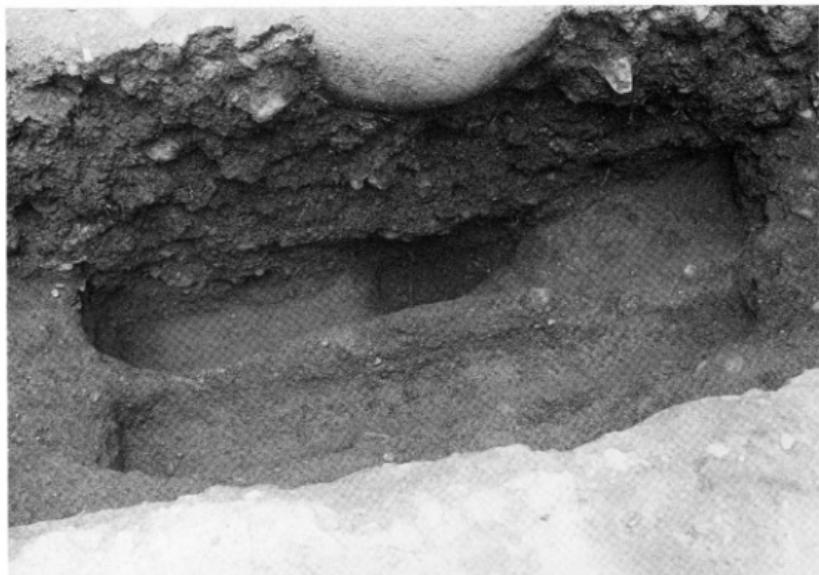
1 入側柱礎石堀形群

(東から)



2 七一と堀形断面部

(西から)



1 七一と堀形丸太地業

(南から)



2 七一と堀形丸太地業

(東から)



1 七一り堀形丸太地業

(南から)



2 七一り堀形丸太地業

(東から)



1 参一ほ堀形丸太地業

(南から)



2 参一ほ堀形丸太地業

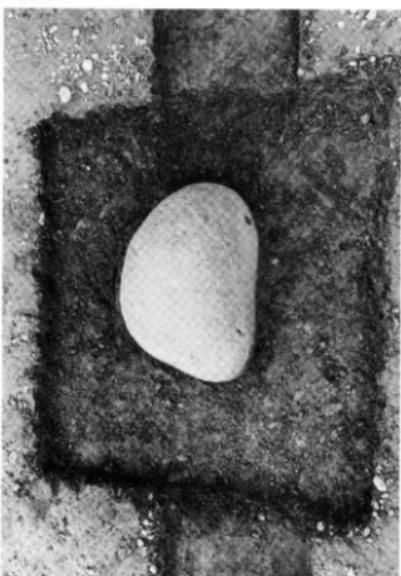
(東から)



1 七一は礎石と堀形



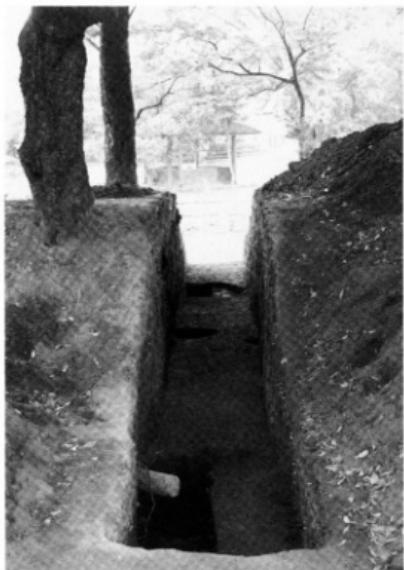
2 七一は礎石と堀形



3 五一は礎石と堀形

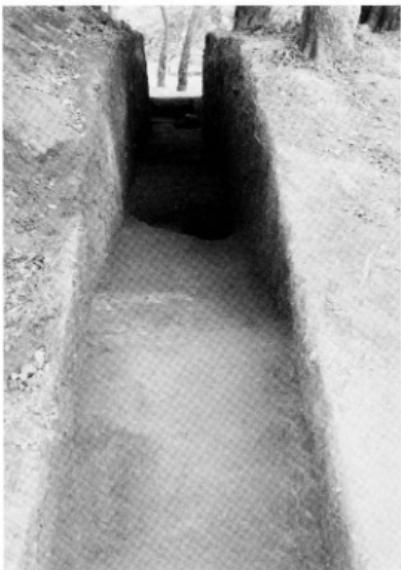


4 参一は礎石と堀形



1 土壘第1トレンチ全景

(東南から)



2 土壘第1トレンチ全景

(北西から)



3 土壘第2トレンチ全景

(東から)



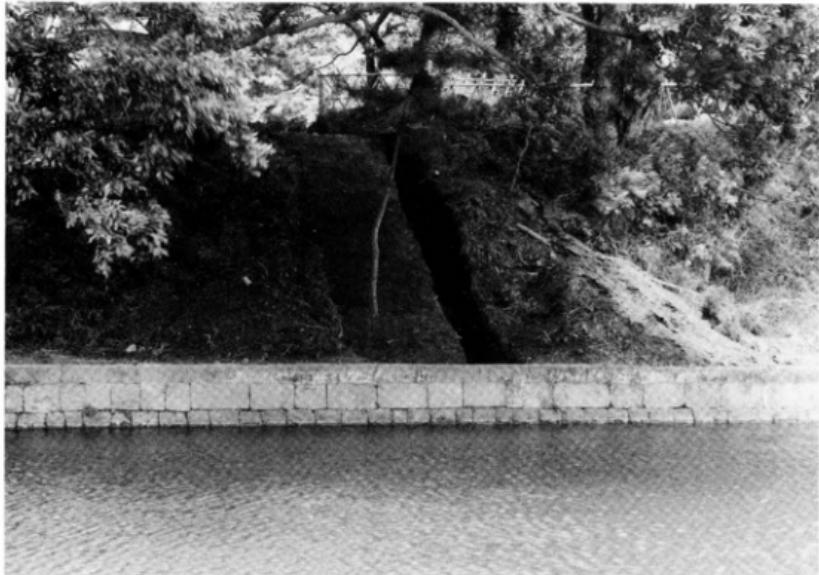
4 土壘第2トレンチ全景

(西から)



1 土塁第3トレンチ全景

(西から)



2 土塁第3トレンチ全景

(東から)



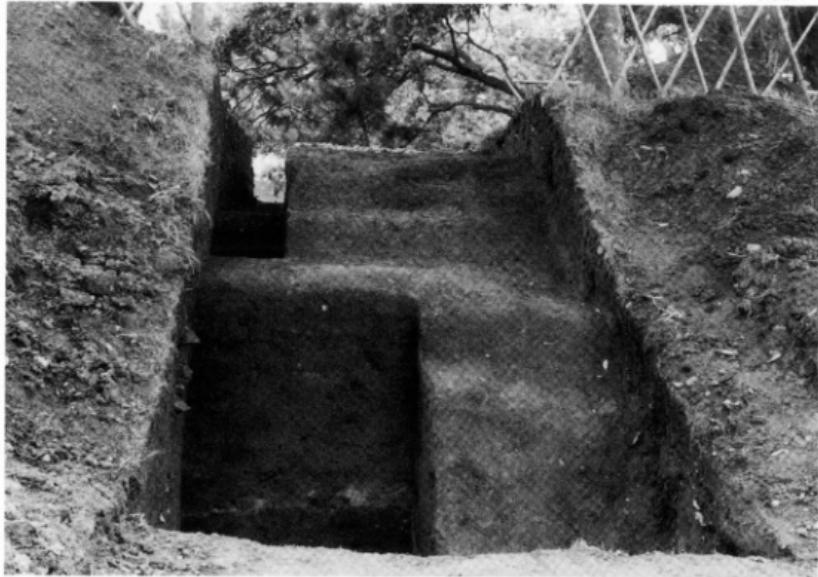
1 第3トレンチ土壘平坦部全景

(北から)



2 土壘平坦部と石敷遺構

(南から)



1 第3トレンチ断面部

(西から)



2 第3トレンチ 旧地表面

(西から)



1 第3トレンチ東端石列

(南から)

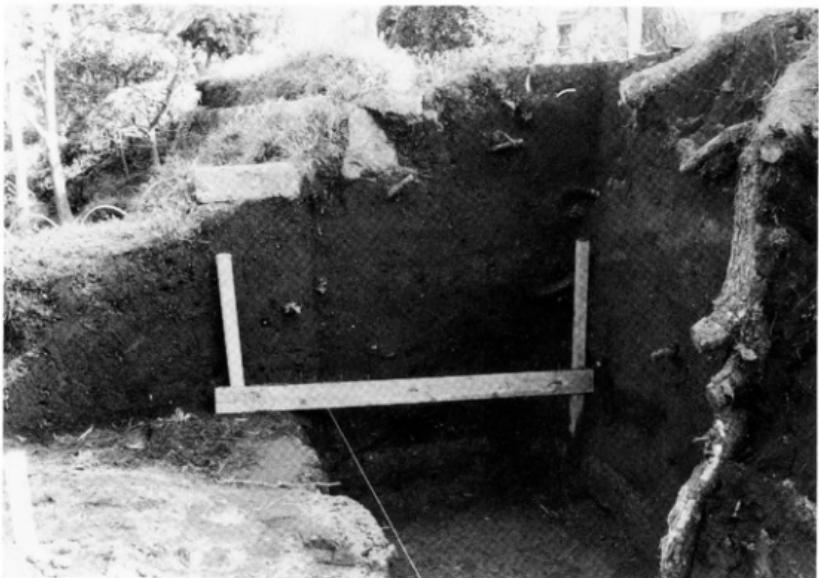


2 第3トレンチ 旧地表面と盛土

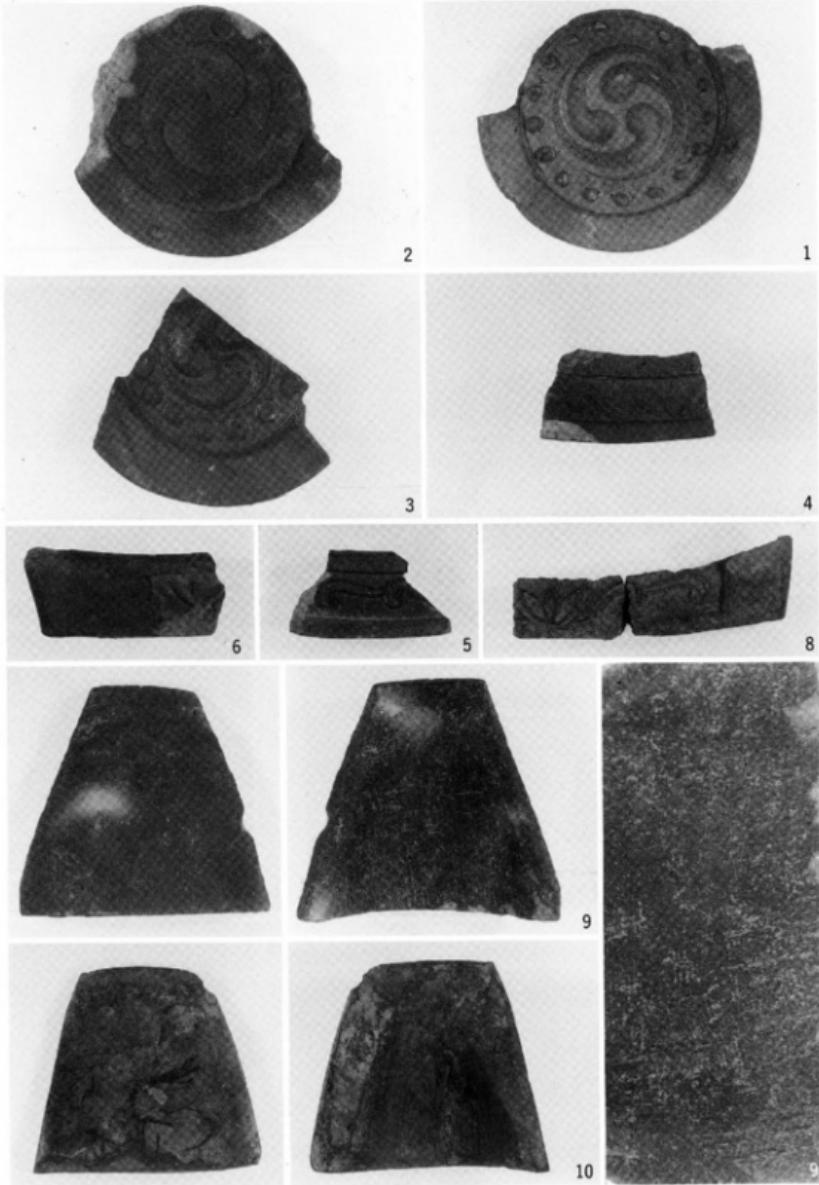
(西南から)



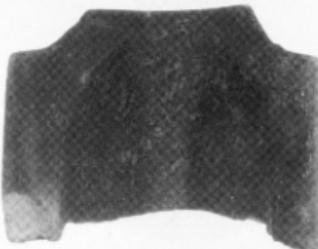
1 二の丸土壠調査状況



2 二の丸土壠調査状況



軒瓦・輪違い



14



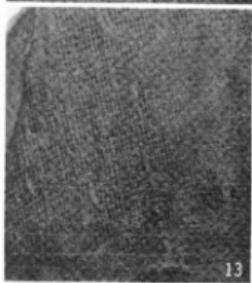
12



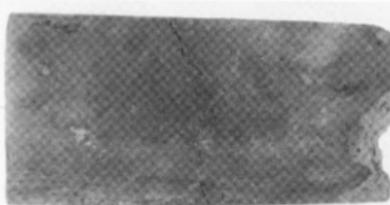
12



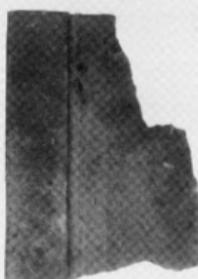
13



13



16



15

丸瓦・塙板瓦



17



11



14



3



7



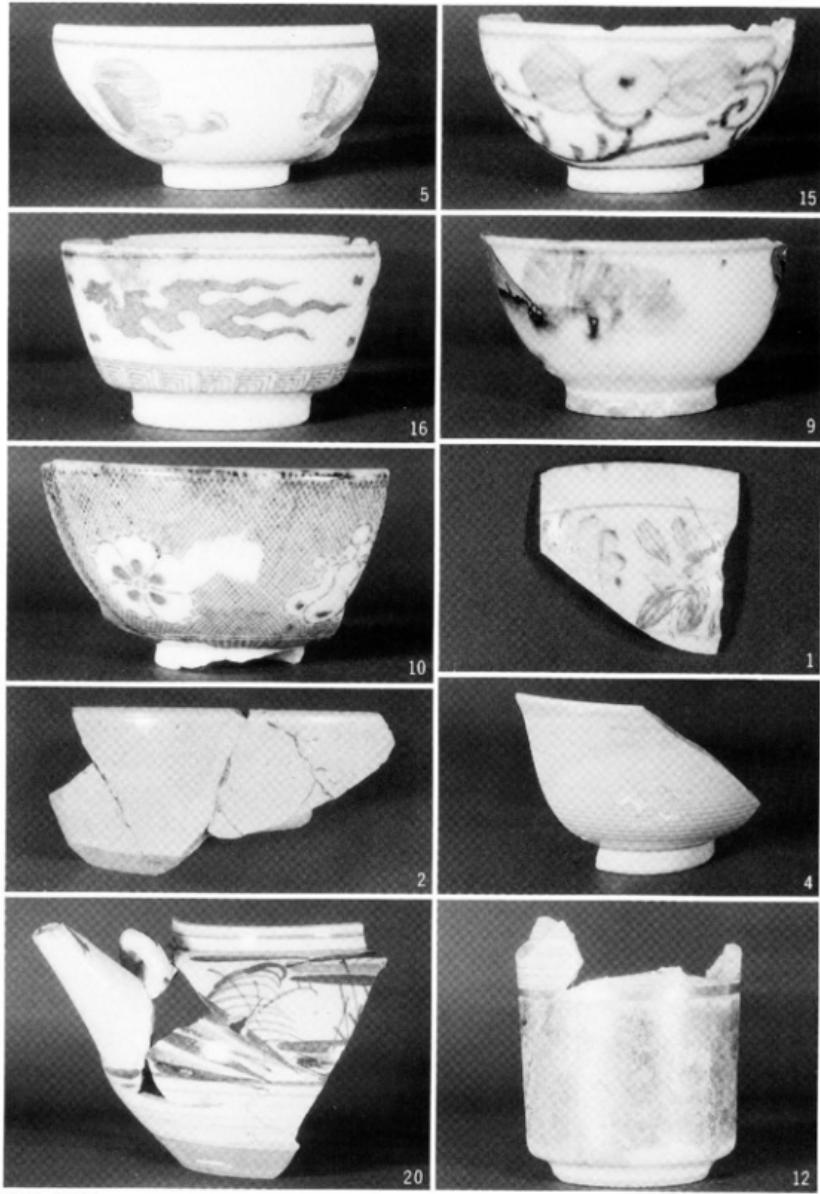
13

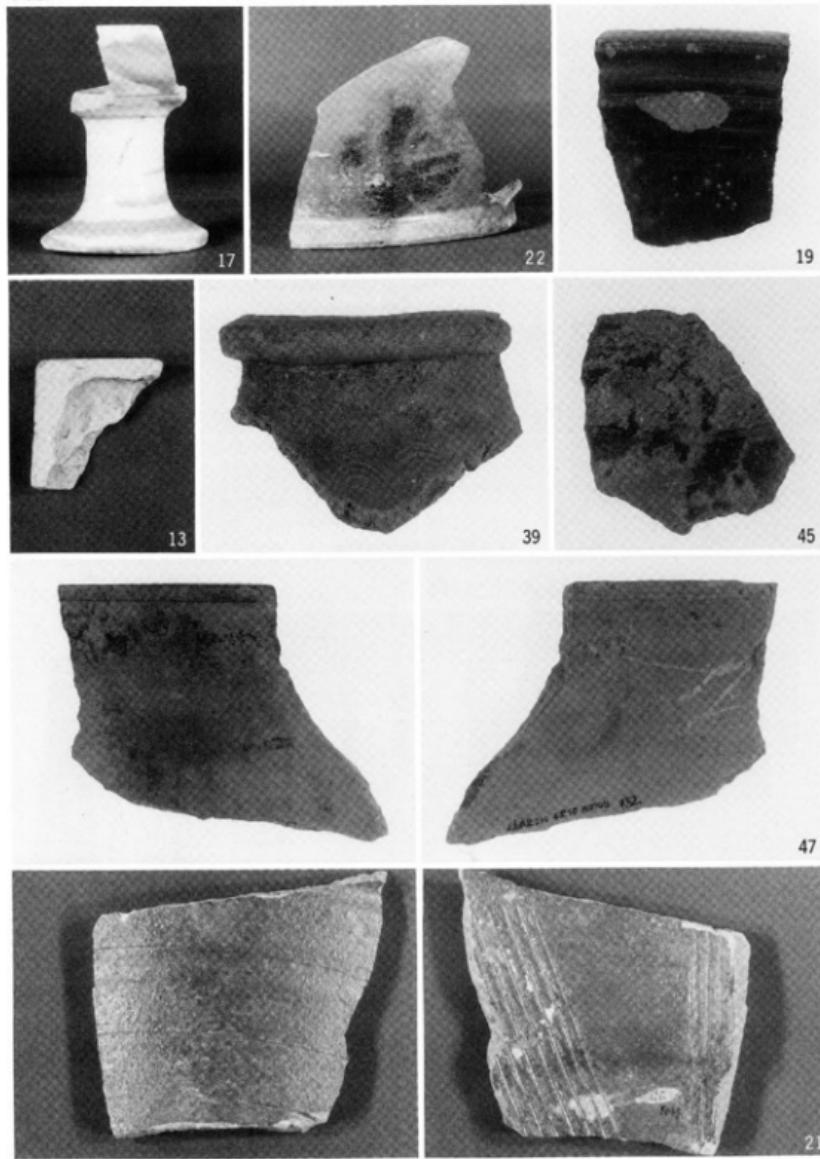


6

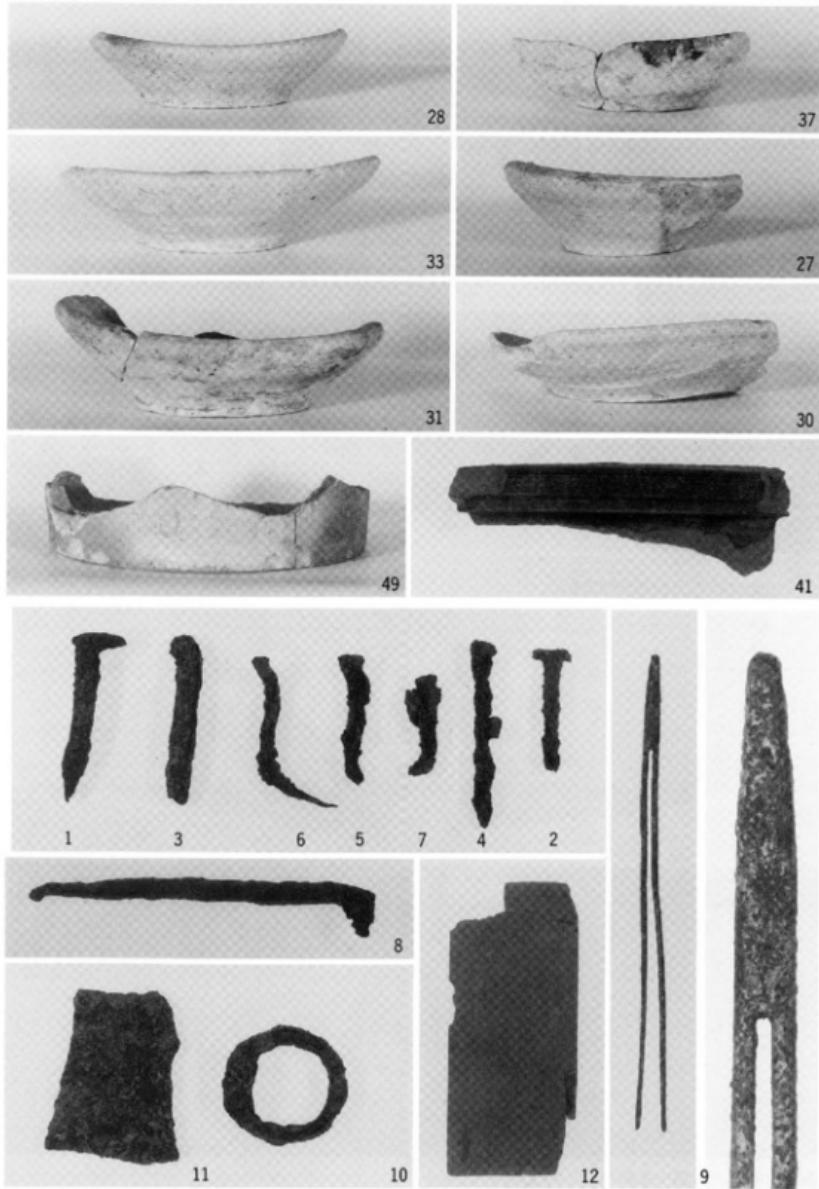


18





磁器・陶器・土器・土製品



土器・金属製品・硯

茨城県指定史跡
土浦城址発掘調査報告書

平成元年3月31日発行

発行者 土浦市教育委員会
印刷所 株式会社 第一印刷所東京支社
発行者 土浦市役所
